
三人の道 ～三人のプロデューサーとそのアイドル達の物語～

ゴクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の道　～三人のプロデューサーとそのアイドル達の物語～

【Nコード】

N2140H

【作者名】

ゴクト

【あらすじ】

「アイドルマスターSP」のストーリープロデュースを元にして、プロデューサーとなる三人が、各アイドル達と織り成すドタバタ劇。トップアイドルを目指すこととなった彼らに、一体どんな試練が待っているのか……

慶次朗視点 序章 傾奇者の子孫（前書き）

始めまして、ゴクトと言います

5様でも、ましてや彼が使うシンの獄屠拳でもありません

まずこの小説を書くに、皆様に一言

この小説は、私、ゴクトの「アイドルマスターSP」のプレイを元に、小説化したものです
プレイを元に行っているため、更新が遅くなったり、しますが、必ず執筆しに来ます

基本的に小説は始めてなので、指摘なんかあったらバンバンしてくれれば嬉しいです

それと、最後に一つ

この作品にも、961プロのアイドル達は出ますが、この作品には、彼女達にもプロデューサーが存在します

だから、これに関してはこう言わして貰います

気にすることはない

また、原作とは少し異なる場面もありますが、そこは気にしないで下さい

以上のことが守れるならば、どうぞ本文へ向かって下さい

慶次朗視点 序章 傾奇者の子孫

流行とは自らの手で作るもの……

そして、栄光とは功績によって得られるもの

俺はそれを知っている……

だから俺は、功績を残したい

血筋ではなく、自らの手で

(ジリリリリリ)

「んっ……スースー……」

(ジリリリリリリン、ゴンッ！)

「がっ！……いっ……てえ」

俺は朝から目覚ましの時計の強烈なヘッドバットをくらって目を覚ました

「……そうか、そろそろ開店時間だったな……」

俺はぶつかった所をさすりながら時計を見ると、時間は9時……

俺は下に降りてエプロンを着け、店の開店準備に取り掛かった

そんな俺の名前は、前田慶次朗

どっかの傾奇者のような名前だが、実は俺はその前田慶次の子孫なんだそうだ

だから、俺にも傾奇者の血が流れてる事になる……
もちろん、あだ名は

「慶次」だ

ちなみに、俺の両親は二人とも事故で他界している……

中学の頃は平均的な数値だったし……

なんせ中卒だしな……

中学を卒業した俺は、

「かぶきや」つつう弁当屋を営み、普通に暮らしている

そして、今日も客は相変わらず安くて美味いと評判のノリ弁を買っていく

いつもの事だから慣れているさと思いつつながら、客に弁当を手渡し、金を受け取り釣銭を渡す

だが……

その日常は唐突に変わってしまった

（ジリリリリリ！ジリリリリリ！）

「……はい、かぶきやです……はい……トンカツ弁当が三つと、ノリ弁五つ、おにぎり二つに、玉子丼が一つですね！はい、全部で3250円になります……はい！そこに行けばいいのですね！了解しました……ひゃっほう！」

電話を切った後、俺は歓喜に包まれた

なぜならこんなに沢山の注文は滅多に無いからだ

俺はノリノリで注文の品を全て作り、ルンルン気分で出前に向かつて行った……

誠視点 序章 コンプレックス

僕は見た目にコンプレックスを持っている

どこに行っても、女の子と間違われ

その顔立ちのせいか、友達にもよくコスプレを強いられる

別に好きでこんな顔立ちになったんじゃない……

僕は……女の子ではなくて、男の子と思われたい……

そんな願いが来るのは……いつになるんだろうか……

(キーンコンカンコン)

僕の通う学校の6時間目の授業の終わりのチャイムが、僕を現実へと引き戻す

「以上で今日の授業はこれまでだ。それと神崎、後で職員室に来なさい。分かったね？」

「……はい」

先生に突然告げられた職員室への招待

僕は何か悪いことをしただろうか？

授業を真剣に受け

素行にも問題はない

なおかつ平凡な一日を過ごしている

ただそれでも僕は、消えることのないコンプレックスを抱えている

それは……

「なあ誠、後でこのメイド服を着てみてくれないか？おまえに結構似合うと思うんだよ、きつと……」

僕の顔立ちが、女の子のような顔立ちと言うことだ……

僕の名前は神崎誠

ごく平均的な高校三年生になる男子だ

ただ、皆は顔つきを見て、だれもが最初、僕を必ず女の子と見間違える

家族構成は父と母と、僕の三人

父はビジネスグループの社長をやっていて、今はアメリカのニューヨークにいる

母は、医者を勤めていて、家にいる時間が全くない

つまり、家には僕一人だ……

僕は、職員室に入るなり、担任である蓬澤先生に

「あの……僕、悪いことをしましたでしょうか？」

と聞いてみた

すると先生は笑って

「いいや、君を読んだのは他でも無いんだ、君に頼みたい事があったね……だってホラ、来週から春休みに入るし、君も暇じゃないかなって……思ってたさ」

そう答えた

相変わらず先生の言うことがイマイチわからないけど……

「まあ座って……生菓子もホレ、遠慮しないで食べな」

先生は、僕を座らせて、生菓子と緑茶を差し出した

「ところで先生、いつ本題に入るんですか？」

僕は先生に聞くと、先生はおおそうだと手をポンツと叩き、あるものを僕に手渡した

「……なにに、下記の者を我が校の新しい学科のモニターとして、765プロのプロデューサーとして、一年間アイドルの育成に向かわせる……神崎……誠!？」

僕は、生菓子を喉に引っ掛けそうになったので、慌てて緑茶を一気に飲み、安堵の息をついた

しかし、ちょっと待て？新学科だあ！？

それに、何で僕が選ばれ……ちょっ！僕が！？

「せ……先生！何なんですか！これ！」

僕は紙をデスクに叩きつけて先生に質問をした

「これ？これは私が提案した芸能教育科のモニターとして君を推薦した紙だ」

「ですが、765プロと言えば、かぶきやの近くにある人気の無い事務所ですよ！？それに、僕なんかプロデューサーなんて大きな仕事を任されるなんて……」

なんてこった……

新しい学科を作るが為に僕は高校生活最後の年、しかも進路を決めなくてはいけない年にアイドルのプロデュースだなんて……

僕はがっくりと膝をついた

しかし、先生は笑顔で僕の肩に優しく手を置いて

「大丈夫だろう？君は去年も一昨年も生徒会長をやっていたんだから、それにこの推薦状は結構メリットがあるぞ……」

「メリット……ですか？」

僕は頭の上に？マークを浮かべながら先生に質問をした

「ああ……受けてくれるなら、一年間学校に行かなくて済む、さらにお前は転科したことになるから、このモニターが大成功に終われば、君は芸能教育科初の卒業生となる！あまつさえ君の進路にも大影響だ！どうだ？こんなチャンス滅多に無いぞ？」

うぐう……こんな優遇待遇は滅多に無いが……モルモットになるのはちよつと……

「明日まで時間を下さい……今だけじゃ……決められないです、それと、お菓子ありがとうございます……失礼します!」

まあ、これが一番の選択肢だろう

僕は先生にそういつて深くお辞儀をし、職員室を後にした

学校を出た後、僕は自宅に帰り、邪魔な荷物を置き、私服に着替えて行きつけのジムに向かった

ジムは、走って数分の所で、隣にはかぶきやがある

僕は一旦かぶきやの中に入り

「コーラと天井一つ」

とりあえずいつものやつを頼んでいた

※

「ふっ!はっ!てやあ!」

バシバシとサンドバッグ相手に熊パンチやタイガーキックをぶち込んだり、いまじゃすっかり忘れ去られたビリーズブーツキャンプを

やっではや一時間

十分に汗をかいたので、僕はジムを出て、コーラを飲みながら夕方の町を歩いていた……

すると、ふと目の前に大きな建物が眼中に入った

765プロ

窓ガラスにガムテープで765と貼られているのが目立つそれを見て、僕はため息をついた……

心配なんだ……とても

いくら生徒会長をやっているとは言えど、プロデュースは生徒会とは違う、場合によっては、僕の人生が台なしに成り兼ねないのである

（僕に出来るんだろうか……）

そう思いながら僕は765プロを後にし自宅に向かってまっしぐらに歩いていた
ところが……

ドンッ！

突然横の曲がり角から何かがぶつかってきて、僕はその場に尻餅を

ついた

ぶつかった何かも同じく尻餅をついたみたいだ

「痛たたた……だっ大丈夫かい？」

僕は、男の子に聞いてみた

「痛たたた、ボクなら大丈夫です……それより、君の方こそ、ボクと物凄い勢いでぶつかったみたいだけど……」

「大丈夫だ……たいしたことはない」

男の子の心配に、僕は大丈夫と親指を立てた

「次からは気をつけるよ……すみません……」

「あっ……はい、ボクの方こそぶつかってしまって、ごめんなさい」

僕はこちらの方こそと再び男の子に返したあと、男の子は再び走りだして、どこかに行ってしまった……

そういえば、あの子の名前を聞くの忘れたな……

なんと言うか、あの子とまた会いそうな気がしてさ……

翌日、僕は先生に昨日の事についての答えを伝えるべく、先生の自宅に寄った

「おお！神崎、よく来たな！それで……お前の答えは？」

僕は頭の中で、文章をまとめ……

「行きます……僕を……765プロへ向かわせて下さい……」
そして頭の中で考えた文章を、僕は先生に伝えた

「よく言った！さてつと……それじゃあ準備をしないとな……行くぞ！」

「はい！」

こうして、僕の一年は、プロデュースと言う新学科を賭けた試験生という形ですごす結果となった……

高校生活最後の年に、僕は一人、甘酸っぱい高校の青春を奪われたのであった……

誠視点 序章 コンプレックス（後書き）

以上で第二主人公の序章を終了させていただきます

今回は、シナリオについてご報告します

この作品は、タイトルに書いてある通り、三人のプロデューサーが主人公の為

慶次朗編は「ミッシンググムーン」

誠編は「パーフェクトサン」

そして次回登場する三人目の主人公が「ワンダリンググスター」の担当になります

面倒臭い構成になりますが、応援してくれると、嬉しいかぎりです
……

それでは皆さん、第三話でまた会いましょう

結城視点 序章 邂逅と機会（チャンス）

束縛されるのが嫌だった……

勝手な大人達が私の人生を決めるのが嫌だった……

なにより、私自身の道を奪われるのが嫌だった……

私の道は、私自身の手で見つける……

勝手な大人達を、見返せるような道を……

私の名前は桂木結城

神社の隣にある四畳半の家に一人、暮らしている17の男子だ

私の両親とは別々に暮らしている

何故なら、私の家は、カツラギ財閥と呼ばれる大企業の家柄で、私を跡継ぎにしようと言う父が、素晴らしい程にスパルタ教育をし始めたのがきっかけだ

将来と自由の束縛

富豪と言う名の牢獄

父の虐待に近い教え

とどめに母の無情な言葉……

あらゆる自由を奪われた私に、我慢出来る筈がない
私は道具として扱われる事に激怒し、家を飛び出した

家を離れた私は、寂れた神社の神主として新しい人生を送っていた
……

そんなある日の事だった……

「さて……今日も張り切って行きますか」
いつもの如く、朝の神社の周辺の掃除と日課である二時間の座禅をし……その後今日の夕食を買い、近くのスーパーへ行き、沢山の食料を購入した

その夕方、空の太陽がてっぺんに昇る昼頃に私は神社に戻る、すると……

「……どうか自分が変われますようにどうか自分が変われますようにどうか自分が変われますように」

何やら賽銭箱の前でぶつぶつと願い事を呟いている女の子がいるじゃないですか

私は、急いで裏から入り神主の格好をし……

「何か……悩み事かな？」

と女の子に話かけて見た

「ひう！」

女の子の背中がビクツとしたのがよく解る

相当、臆病な性格だと一目で分かった

しかし、私は間髪いれずに、女の子の目の前にやあこんにちはって顔を出して見た

「……」

女の子はカチンコチンになって、私を見ていた……

いや……正確には目を開けたまま気を失っていた……

とにかく、私は神社の中に女の子運び、その後、私は賽銭箱や鈴の掃除に取り掛かった……最近汚くなったからね……

掃除を終えた後、私は彼女の様子を見に、本堂に入って行った

「うう……ひっく……」

入ってみると、彼女は泣いているじゃありませんか！

たしかに、目を覚まして見た光景が神社の中ってのは下手なビックリカメラよりもサプライズだもん……

「おい、大丈夫か？」

「ひっ！」

彼女は私を見るなり、『来ないで』っと体で主張していた……
しかし私はそんなのお構い無しで彼女に歩み寄る

「こ……来ないで下さい！わ……私は、男の人と犬は苦手なんです
う！」

彼女は肩を震わせながら、私にそう言った……だが私には関係ない
「そうか……だが、君はさっき自分を変えたいって賽銭箱の前でそ
う言ってたよね？」

「え……はい……私、貧相でチンチクリンで、男の人と犬が苦手で
すが……私は自分を変えたいって……」

「ほお……まあここに来たのも何かの縁だ、生菓子はいかがかな？
限無屋の良いお茶もつけて……」

私は、彼女の目の前に、ちまたで人気の限無屋の生菓子『トクガワ』
と緑茶『博霊』を差し出して、笑顔で彼女を見た

「あそこの茶屋は、美味しい和菓子と茶が買えるからな……特にあそ
この茶は香りが良くてね……今じゃこのセットは私の必需品さ」

「あつ、何となく判ります、あそこのお茶は結構良い香りがして……
味もお茶なのに爽やかで、あそこの和菓子とはよく合います……」

「おっ！君もあの店の味が判るのか」

「はい！私、日本茶が好きなんです」

「奇遇だな、私も日本茶派なんだ」

そして、茶が彼女の的を射たのか、私達はそのままお茶について熱

く語り合っていた……

そして、すっかり空が橙になって、私は彼女を送って行った

「ここでいいのか？」

私は彼女に聞いた

765プロ

人気はかぶきやに奪われているものの、あそこには無限の可能性を秘めたアイドル候補生達が数人いると、カツラギ財閥の情報網に載っていた

「はい、こう見えても私、アイドル候補生の一人なんです……ただ、私なんかアイドルだなんて……」

「自分を変えたいっていったのは君でしょ？ だったら自信を持つべきだよ」

「で……でも、どうせ私なんか……」

「あーあー！ 泣くなって……んっ？」

765プロのビルから誰かが出て来た……

その人はまさに社長といった風貌を醸しており、素顔を明かしたくないのか、それともただのマスクマンなのか。

ブルーマンの黒バージョンと言えば判りやすいか……とにかくその人物は、彼女に近づいた

「おお！ 遅かったじゃないか雪歩君、私はてっきりまた何かあったのかと思っていたよ」

「遅くなってすいません……うう……」

「泣かなくてもいい、私は別に怒って何かいないから、ところで君

は」

「私は……桂木結城と言います、ワケあって、そこにいる雪歩ちゃんと一緒にいました」

「なに？君が雪歩君を？もしや君、雪歩君を……」

黒覆面の眉間部分にシワが寄っているのを私は見た……

「何を言ってるんです！彼女は私の神社にお参りしに来ていたんです、」

このままでは私は誘拐犯と間違われそうなので、正直に述べた

「おお、そうだったのか……いやぁ失敬失敬、なにせ最近物騒だからね……」

「わかってもらえたなら結構です、それでは私はこの辺で……」

そう言っただけ私は、彼女……もとい雪歩ちゃんにじゃあねと手を振り、自宅に戻ろうと踵を反してみると……

後ろには、大きなビニール袋を持った青年がいた

「ど……どうも……かぶきやの前田慶次朗と申します……貴方が、高木順一郎さんですね？」

「おお！君があのだ当屋の主人か……いやご苦勞様……」

（こっこの人があの高木社長！？）

私は驚愕した……

この黒ブルーマンがあの高木社長である事に……

そして、さらに目の前には、あのかぶきやの主人がいる

かぶきやの主人とはいえ、この青年があのお店を、一人で営んでいるとは……

私は、その超衝撃的光景に後ずさりをするように、後退するが……

ドン！

今度は後ろからどつかれるような感じで何かにぶつかった

「痛ったあ……またかよ……」

後ろを振り返ると、今度は小柄の学生が尻餅を突いていた

「ご……ごめん、君……大丈夫か……えっ君！君もアイドル候補生かい？」

「僕は女の子じゃない！」

余計な事を言うんじゃないかった……

私はすまないとその学生に謝ると、学生はいいよって起き上がり、高木社長に向き直った

「芸能教育科の神崎誠、ただいま参上つかまりました！」

「いやいや普通に話して良いよ、しかし……」

高木社長は私と、かぶきやの主人、そして神崎誠と名乗った先程の学生を見た……

「うーん、三人とも何と良い面構えだ、ティンと来た、君達私について来なさい」

そう言われ、私達は社長の後を追うように、ホイホイと765プロの中に入っていったのだ……

そして私は、両親を見返す大きなチャンスを手に入れた……

結城視点 序章 邂逅と機会（チャンス）（後書き）

またまたこんにちは、ゴクトです

次回の共通視点の後、本格的にシナリオスタートとなります

桂木編は、完全にプロデュースアイドルがバレていますが……

Eんです

ですが、桂木以外の二人は、次回の話でプロデュースアイドルが決定します

それでは皆さん、次回の話を楽しみにしてお待ち下さい！

共通視点 序

神崎誠

前田慶次朗

桂木結城

彼ら三人は導かれる様に765プロで出会い
そして今……彼らは社長室にいる

神崎誠は自分の劣等感を克服するために

前田慶次朗は偶然と人柄故に

桂木結城は両親を見返すために

それぞれ道は違えども、目的は同じ……

三人の道を閉ざしている門が、今開かれようとしていた……

765プロ社長室

「まあ、そこに座りなさい、何楽にしていゝめ構わないさ」

「……はあ」

慶次朗は椅子にもたれ掛かり、キセルの形をしたアロマパイプの中に火を点けた

「我社は今、アイドル候補生をトップアイドルに導くプロデューサーを募集していたんだ、そこにいる神崎君だけでは何かと不安でね……どうかね？君達二人もプロデューサーとして？」

「私は、別に構わないです……」結城は無表情で立ち上がり、そう言った

「……アイドル育成か……社長、俺何かが言うのもアレなんですが一応かぶきやの営業もしなきゃなんないんですよ……店の店員は俺だけですし……」

「その件に関しては、判っている、私もかぶきやののり弁が大好きでね……」

社長は頭を照れ臭そうにしてかきながらそう言った

慶次朗は、ラベンダーのアロマを吹かし終えろと、アロマを持ち替えて、トーントーンとアロマの残り粕を携帯灰皿に入れた

「そうですか……そこまで言うのなら、俺も引き受けますが――」

「よく言ってくれた二人とも、これで新しく三人のプロデューサーが入った訳だ……そうだ、君達にも紹介しなければなるまい……義道君、こっちへ来たまえ」

社長の合図に答えるように、一人の青年がこちらに現れた

「……むあー、社長？呼びやした？」

「呼んだとも、ホレッ、目の前に君と同じアイドル候補生のプロデ

ユーザー達がいるだろう、自己紹介をしなさい」

「……義道京輔だ、よろしくな」

義道は、そういうと、力無く手を振りながら倒れ、夢の中に入ってしまった

「……義道君は二年前にここに就職してきたプロデューサーでね、まだ担当アイドルがいないから、事務員をしているんだ……おっといけない。大事な事を忘れていたよ。君達は、明日からこのアイドル候補生達の中から一人ずつ選んで、その子と二人三脚で頑張って貰うよ。」

高木社長はそう言うのと、9枚の履歴書を三人に見せた……
慶次朗は三枚の履歴書を手にとって眺めているが、誠と結城の二人はというと……

「私は言うまでもない……」

結城は先程の少女、『萩原雪歩』の履歴書を

「社長、この子は！」

誠は、質問するように『菊地真』の履歴書を高木社長に渡した

「神崎君が菊地君を、桂木君は言うまでもなく、雪歩君を選ぶんだね？」

「えっ？社長……僕はこの子を見たことがあるから、質問したんですけど……」

「ほお、菊地君を知っているのかね？」

誠の質問に高木社長は誠を見た

「はい、この子……昨日僕が帰る時にたまたま曲がり角でぶつかった……」

「ふむ……そんな事があったのか、彼も昨日、そんな事を言ったな……」

「彼？」

高木社長の一言に、誠は頭に？マークを浮かべた

「おお、すまないすまない、菊地君は女の子だ、私は彼女をついい彼と言ってしまうんだ……」

笑いながら、すまんすまんと手を振る社長に、誠は……

「僕と……同じだ……」

そうポツリと呟いた

「同じ？君が彼女と？」

誠の言葉に高木社長は首を傾げる

「ええ……僕はよく女の子に間違われるんです……そしてこの子は、逆に男の子と間違われてる……」

誠は真剣な表情で高木社長を見て、そして……

「決めました……僕は、菊地真をプロデュースします」

静かながらも、威厳がある声でそう言った

「そうか、君にも色々つらい過去があったのだな……そこはあえて聞かないでおこう。良いだろう、君に菊地真君のプロデュースを認めよう！」

「ありがとうございます……」

誠は高木社長に深くお辞儀をすると、社長は、まだ担当アイドルの決まっていない慶次郎を見た

「どうだね？君は、決まったかね？」

「いいえ……まだです……あれっ？」

慶次郎は、三枚の履歴書を眺めて、ある一枚の履歴書に目がいった（この子、確かいつも夜に俺の店に来て……天然水と一日バランス弁当を買ってる子だよな？歌に全てを捧げる……か……よし！）

慶次郎は、両手で頬をピシャツと叩き

「俺に、この子をプロデュースさせて下さい！」

三枚の履歴書の中で、真ん中の履歴書を選び、高木社長のデスクにたたき付けた！

「き……『如月千早』君を選ぶのかね……しかし、どうしたんだ急に……」

「千早……て言うんですかあの子……あの子は何度か、俺の店で、よく来るサラリーマンに紛れて一日バランス弁当と天然水を買っています。」

「ま……まあ彼女は……歌うことに全てを捧げているからね。事務所一人残ってレッスンをしているんだ。それを考えると、多分千早君は……でも、君は彼女を最後までプロデュース出来るのかね？」

「……俺にも判りません」

社長の質問に、慶次郎ははにかみながら微笑んだ

「ですが俺は、何だか放って置けないんです。彼女が……」

慶次郎は、その場に胡座をかき、社長を見つめ……

「だから、お願いします！俺に、如月千早のプロデュースをさせてください！」

さらに膝に手を置いて、深々と頭を下げた

その姿は、まるで狂言廻しのようなモノだった……

「慶次郎君、君の傾きっぷりには負けたよ……君なら、千早君と良いコンビになれるかもしれない、大儀であった」

「……ありがとうございます！」

慶次郎は立ち上がって社長に向き直り、再びお辞儀をした……

「ところで慶次郎君、君のその性格といい、面構えといい、君はまるで前田慶次そのものじゃないか？」

社長は慶次郎にそう質問をすると、慶次郎は……

「当たり前じゃないですか……俺は、その前田慶次の子孫なんですから」

と笑顔で答えた

「君が……凄いなあ……」

「前田慶次の子孫か……」

誠と結城も、その事を聞いてふむふむと頷く

「よし……では担当アイドルが決まったようだし、明日から各アイドルに会って、早速プロデュースを始めたまえ、そして、今日から誠君と結城君は、ここの寮を使いたまえ……慶次郎君はどうするかね？」

社長は慶次郎に質問すると、彼は……

「俺も、そうします……俺、しばらく店を閉めるつもりでしたから……」

悲しそうな表情で答えた……

「そうか……残念だよ、今日からしばらく君の作る弁当が食べれなくなるなんてね……」

社長は惜しむように言ったが、慶次朗は

「弁当が食べたら俺に言ってください、いつでもお届けしますよ……」
と笑顔でそう答えた

かくして、三人の道は、開かれた

これから起こる沢山の試練を乗り越え

彼らはトップの座をつかみ取れるのだろうか……

その日の夜……

「いいのかね？君が彼女のプロデューサーだなんて、彼女は世間知らずだ、まだアイドル候補生としてはデビューはどうかとは思いうのだが……」

月明かりが差し込む社長室で、高木社長は一枚の履歴書を見て一人の青年に話し掛ける

「心配いりませんよ、任せてください。あいつは俺の幼なじみですから……それと、例の計画の事で話があるんですが」

男は、二枚の履歴書を高木社長に渡し、社長はそれを見た

「馬鹿な！奴がプロデューサーを！？」

「ええ……多分、IU三部門のうち二部門を手中に収める為の奴なりの考えでしょう……『プロジェクト・フェアリー』の二人の新人とそのプロデューサー、その二組のオーディション勝率は……十割を占めています、今の我々ではまず勝ち目はありません……」

「うーむ……では、どうすれば良いのかね？」

「それはですね……」

「……いいのかね？君は慶次朗君と戦う事になるんだぞ」

「その時は俺もあいつも、強くなってますって。それに、沢山の情報もて手に入るし……」

「どうしても……やると言うのだね」

「はい……」

「……君には迷惑をかけるね、もし奴の事で何か判ったら、その時は報告してくれたまえ……」

「了解……それでは、失礼します」

長い会話の後、青年は社長室のドアを開けて出て行った

「……黒井……また同じ事を繰り返すのだな……」

社長は一人、社長室で三枚の履歴書を見ながらそう呟くのであった

⋮

共通視点 序（後書き）

第四話をご覧になりました、誠にありがとうございます

今回の話で、一体彼等と一番合うアイドルは誰かと悩みに悩んだ結果

神崎誠↓菊地真

理由 同じコンプレックス持ち

前田慶次朗↓如月千早

理由 主人公が前田慶次の子孫だけあって、彼女とのコンビは良
さそうだなあーという考えから

桂木結城↓萩原雪歩

理由 もうプロローグでフラグ立てちゃったから致し方ない

義道京輔↓????

理由 幼なじみ、誰かは次回の慶次朗視点で判明

っとまあこんなしょぼい理由ですが、決まりました……

さて、次回から各視点でのプロデュースが始まります……

シーンを省いたり、オリジナルシーンも入ったりしますが、まあ穴
でも掘りながら頑張りたいと思います！

それでは皆さん、次回、前田慶次朗視点初日でまたお会いしましょ

う！

慶次朗視点 初日 輝きの声（前書き）

前田慶次朗（18）

身長 175・8センチメートル

体重 65キロ

趣味 弁当の新メニュー開発 料理

家族構成

父母ともに中学時代に他界

現在一人っきりで生活をしている

担当アイドル 如月千早

慶次朗視点 初日 輝きの声

さて……俺、前田慶次朗は朝から戸惑いを隠せないでいた……

何故なら、俺は起きて飯を作るまでは普通だったのだが

飯が出来上がってテーブルをふと見ると、目の前には小さな女の子がいて……鼻をヒクつかせているではないか……

「君は……つつうか、いつの間にそこにいたのか？」

「えへへー何だか良い香りがしたので寄ってみたら、近くのお弁当屋さんの店長さんを見かけたんです……だから——」

女の子は笑顔でそう言っていたが、お腹の音が漏れたのは、聞き逃さなかった

「……はあ、これでも食うか？」

俺は、女の子に自分用の弁当を渡すと

「ええ！良いんですか、私お金なんて——」

そう、俺に言ったが

「いいよ、今は弁当屋は休んでるし、遠慮しないで食べなよ、弁当ならまた作りゃ良いワケだし」

まあその分時間は掛かるが、腹空かした奴は放って置けないんだよね……

とにかく、俺はそう女の子に言う

「うっうー！ありがとうございます！あっ……この事は、プロデューサーには内緒にしてくださいね？」

っと元気あるお辞儀をし、俺にそう言った……

その後、俺はさっきの女の子と765プロに行き、事務所で何やらオロオロしている制服の女性を見かけた……

「……どうしよう……きっと誰かに捕まったんだ！もしかして今ニユースで話題の三角頭の通り魔とか！？あゝ！やーよいー！アタシが今助けに行くー」

「ちよいとアンタ？もしかしてこの子の知り合いか？」

女性は俺を見て……いや、正確には俺の隣の女の子を見て嬉し涙でその子に飛び付いた

「やよいー！心配したんだから！アンタ今までどこ行ってたのよ！」

「その子は俺の所に来たんだ」

俺はやよいと呼ばれた女の子の頭を撫でる女性の質問に横から挟むように答えた

「へえー、って事は、お前が私の可愛いやよいをさらった誘拐犯かあ！」

「違う！やよいちゃんは腹を空かせていたんだ……だから俺が飯を作って、彼女に食わせてやったんだ」

俺はそういうと、やよいを見てゴメンなとウインクをした

「えっ……そういえば、アンタ……かぶきやの店長さんに――」

「そうだ、今日からプロデューサーとしてここで働く、かぶきやの店長だ名前は前田慶次朗、ちなみにかぶきやはしばらくの間休業するから、来ても無駄だよ」

女性は、驚いた顔で俺を見て、しばらくして、あははと笑い出し……

「……ごめんなさい」

と土下座をしたが、俺は彼女を立たせ

「構わないよ、よく小さい子供に美味い弁当の残りを使った飯を食わせてやってたから、それにアンタ、以外にアホだって事が判ったし……」

何て軽く許した……

「失礼ね！アタシはこれでも高校卒業ほやほやの社会人よ？これでも成績はトップだったんだから！」

「でもその割にはかなり浮いてたよな？」

「うるさいわね！」

女性は、顔を真っ赤にしてそう言った後

「っと、怒ってる場合じゃないや、アタシの名前は奥村利美、リミでいいわ、そしてこの子がアタシがプロデュースしている高槻やよい、よろしくね！」

「よろしく願います！」

リミは自己紹介をした後、やよいと共に深くお辞儀をし、俺はリミとやよいに握手をした

さて、いよいよ本題となる如月千早との対面なのだが……

「社長に言われた通り、隣の部屋に来てみたが……暗っ！」

俺の目の前は、まるで海苔をびっしり詰めたような、または周りに黒ペンキをぶちまけた用な驚きの黒さだった……

「千早、千早っと……んっ？あそこかなきつと？」

俺は慎重に部屋に入り人の気配がする方向に歩いた

「この曲……ブラームスの口短調に似ている。けど、抑揚の付け方と、振り幅が、やや大きい……」

何だか難しい言葉が沢山聞こえて来るのだが……

社長が言った通り、すごい……奴だ……

そう思いながら俺は、声が聞こえる方向を向いて一歩あるいたが……

「あっ!? 誰、です!？」

もう彼女の目の前だったのか、声が大きく聞こえ、俺は驚いてその場に転倒した

「……あの、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、大丈夫……いっつつつ……驚かせてすまない、今、電気をつけるよ……」

俺は、そう言って電気のボタンらしきモノをつけた……

何だかブォォッと換気扇が回っている音がしたので、多分この下だ……ビンゴ!

俺は電気のボタンを付け、部屋を明るくした……

「私に、何かご用でしょうか? 今、私は忙しくて……」

目の前にいる青い髪の女の子、如月千早は電気をつけ終えた俺に對しいきなりそんな事を言い始めた……

「そう、邪険にしないでくれよ。俺は君の面倒を見ることになった……かぶきや主人兼プロデューサーだ……」

俺は、頭をかきながらそんな事を千早に言った

「あなたが……私の……」

「オイオイオイオイ！待て！なんだってんな顔すんだ？一応聞くが……関心、持ってくれてる？」

「勿論です！これから、仕事上のパートナーになるワケですから……どうやら、悪い人ではなさそうですね。少し安心しました」

あのなあ……ガタイはそんな感じだが、俺はただのさえない弁当売りだぞ！？

まあ……

「そう思ってくれんなら、有り難いぜ、さあて……そんじゃあ、全国デビューする為の芸名を決めたいんだが……」

…

…

…

「……プロデューサー？」

思い浮かばねええええええ！

それでも傾奇者の子孫か俺え！

何か……何かきっかけさえありゃあ……

……っ！

「なあ……君の……」

「あっ、私の事は呼び捨てでお願いします」

「んじゃあ千早、君の歌を、聞かせてくれないか？」

「えっ……私の歌を……ですか？」

俺の突然の発言に、千早はきよとん、とした

俺は、千早をボイスレックススタジオに向かわせた

「ここで、一体何をするんですか？」

「さっき言った通りだ……歌を、聞かせてくれないか？」

「は……はあ……とは言っても、一体何を歌えばいいのでしょうか？」

「何でも良いよ、ちゃんと千早が歌えるヤツならね」

千早は、そうですかと首を傾げた後、深呼吸をし、胸に手をあてて、歌いはじめた

その歌声は、天界の神が使うハープのように美しく、心を貫く矢の様に、俺の心に感動を与えた……

そして、その歌声を風に流す彼女の表情は、とても綺麗に見えた

そして、彼女の歌が終わると、俺は知らないうちに拍手をしていた……

「すげえ……流石は歌に全てを捧げたっただけはある……」

「ありがとうございます。」

千早は、俺にお辞儀をする、だが……

「一つ聞いていいか？何で千早は歌にすべてを捧げたんだ？」

俺は一つだけ、千早に質問を試してみる

「今まで私の歌を聞いて、周りはそれを褒めてくれて……」

「なるほど……だから歌に全てをね……確かにそいつは納得だわ。」

俺は顎に手をあてて、ウンウンと頷いた

「だから私は、もっとレベルの高い歌が歌いたいんです。聞いた誰もが、言葉を失うような歌を……誰もが感動してくれる歌を！」

つまり、輝きの歌って訳か……んっ？

「思い付いた！」

「思い付いたって？何がですか？」

千早は、俺に質問をする

「芸名だよ、千早の歌とその理由を聞いて浮かび上がったんだ！」
俺は千早に質問を返した

「千早の歌には輝きがある、だから、千早の芸名を今、ここに発表する！」

俺は深呼吸をし、千早に向き直り芸名を言った……

S h i n っ と ……

「S h i n ……って？」

「一つはまんま輝きから、もう一つは、神人^{しん}って意味も兼ねてる」

「なるほど……」

俺の名前の由来に、千早も納得してくれた……

「それじゃあ、決まりだな」

「それで、決定ですね。いい名だと思います。せいぜい、汚さないようにできれば、と……」

「へっ、汚さないように努力するよ。」

俺は、千早に手を差し延べて、千早はそれを俺の手とは逆の手で取った

（ふう……疲れた、これから千早をトップアイドルに育てるのか…

…才能があるのは確かだが……俺も技術的なアドバイスが出来るようになんねえとな、さて……帰るとするか)

俺は、事務所を出て近くの自販機で、炭酸飲料を買って、缶のプルタブを上げたその時……

「プロデューサー？」

「ぶわっ！」

後ろから千早の声が聞こえ、俺は後ろを振り向こうとしたが、それより先にプルタブが缶を開けるのが早かった
案の定、俺は噴き出した中身を顔にぶっつけた……

「プ……プロデューサー!？」

「ひええ、冷てえ……つと、千早じゃないか、先に帰ったんじゃないのか……もしかして何か忘れ物をしたのか？」

「はい……勉強用の楽譜を、事務所のどこかにうっかり置き忘れてしまったみたいで……後、プロデューサー、顔を拭いて下さい」

「わかってるよ!にしても、千早は勉強熱心だな……」

俺は、確かにつと顔を自分のハンカチで拭きながら、千早にそう言った

「いえ、これくらい当然の事です。トップを目指す者ならば、誰もがやっている事かと……」

「まあな……トップを目指す奴は、形は違っても、同じ努力はしてんだもんな」

「はい……努力せずに極められるほど、歌の世界は甘くありませんから……」

確かに……甘くはねえな……

だが、千早の努力はマジだ、それは俺も知ってる……

「それでは、私は楽譜を探して来ますので、これで失礼します」

「いや、俺が行くよ……千早はここで待っていてくれ」

「えっ！でも、そこまでしていただくわけには……」

「良いつて良いつて、初日最後の仕事くらい俺にやらせてくれ、お前だってつかれてんだろ……んじゃあ行ってくるよ」

「あっプロデューサー！」

俺は踵を返して事務所に向かって走って行った……

「さて……千早の楽譜はどこだ、と」

俺は事務所の中を探し回り、残る場所はオフィスだけだった……誰もいないため、メタルギアのスネークの如く、俺は、オフィスの周りを探していると

がたんっ

何かが倒れる音を聞いた

「んっ？誰だい、このフロアにやもう誰もいないはずだ？」

俺は、音のした場所に向かうと、そこには、ソファアの上で、すやすやと寝ている金髪の女の子がいた……

「くう……すう……うわぁ、おにぎりで出来たお城だ。おにぎり城なの……むにゃ」

……何だか可愛い寝顔とは裏腹に想像すると不気味な寝言を喋ってやがる

「くう……すう……おにぎり城で、ミキ姫は王子様と幸せに暮らしましたとさ……なの」
やばいくらいに頭ん中が花畑になってやがる……
だけど、起こしちゃ可哀相かもな……さて、楽譜楽譜と……

カッーン

「っ！」

今、俺の頭の中で敵がスネークを見つけた……しかも応援なんか呼んじゃってる

そして俺は何かを蹴飛ばしてしまったようだ……

「こいつは……おにぎりの形のマスコットか？」

「……あふう。今の、何の音？」

「げえっ！」

ああ……俺の頭の中で今、敵がスネークを蜂の巣にしている……
撃っても撃っても沢山テング兵が沸いて来る
ピンチ！俺ピンチ！

「い……今のは、俺が床に落ちてたマスコットを蹴っちまった音だ……」

「あっ！それ、ミキのおまじない用マスコットなの！もしかして、拾ってくれたの！？」

スネーク！応答しろ！

スネーク！？スネエエエエク！

などと頭の中で抜かしながらも女の子に話し掛けるのを続ける

「ミキ、星井美希なの。初めまして、ミキの……王子様」

「はぁ？王子様？何を言ってるんだ！」

俺が頭をかきながら美希に質問をすると、彼女は

「あのね、ミキ、彼氏欲しいなって思って雑誌に載ってたおまじないしてみたの、お気に入りのおマスコットを道路に置いて、それを一番先に見つけてくれた人がミキだけの、素敵な王子様になってくれるって言うおまじないなの♪わかった、王子様？」

っとロマンティックにそう言った

……やっぱ花畑だ

「おいおい、俺は王子様じゃなくて、プロデューサーだ！」

「へ？プロデューサー？」

美希は、俺の発言に困惑した……

「そうだ！プロデューサーだ！ちゃんと担当アイドルもいる！」

「ふーん……」

「それに、おまじないなんかで彼氏を作るとか……お前はな、そんなもんで彼氏作れんだったら苦労はしないぜ？」

「……」

美希は俺の話を笑顔で聞いている……

「それにお前、アイドル候補生なんだろう？ならお前は……聞いている？」

「……結構好きな声なの」

「……はぁ？」

美希の発言に、今度は俺が困惑した

「どうしよう、本当に好きになっちゃったかも……」

「おいおいそれは困る、まさか……お前自分を俺の担当アイドルにしろ何て言わないよな？」

「うん！ねえねえ！ミキを君の担当アイドルにしてみない？」

うん！案の定言いやがったコイツ
こりゃあジョゼフも涙目だ

「だが断る！」

「えー！良いの？ミキのプロデュース、すっごく簡単だよ？」

「簡単って……お前は楽天的だなあ……レッスンしないでトップアイドル？無理だ！お前は――」

「美希はかなりの才能の持ち主さ……」

俺は、声がした方向を向くと、そこには義道京輔がいた……

「義道……」

「そいつは765プロの期待の新星さ……そして俺は、こいつと幼なじみだ」

「むーキョウスケは良いところで必ず来るの！空気が読めないの？」

「おめえに言われたかねえ！」

義道は俺の目の前で、美希の額を小突いた

「ねえねえ！キョウスケからも言ってやってよ、ミキを……」

「慶次郎だ……」

「そうそう！慶次郎の担当アイドルにしてくれて」

美希はソファーに寝転んだまま義道を見て言った……

「……無理じゃないか？」

「えー！なんで？」

「だってそれは社長が決めることだろ？だから無理だ……」

「むー……そうだ！だったら社長に頼めばいいの！」

「あゝあゝ！？」

「……」
目を点にしている俺をよそに、美希と義道は二人で漫才状態になっている

「だから！明日、社長に頼んで見る！そうと決まれば今日は帰るの！」

「おい！待てよ美希！」

義道は美希を止めようとしたが、彼女は素晴らしいナギツで事務所を出て行った

「……行っちゃった、困るんだよなあ、恋に一途なのは良いことだけど、あいっ……すごい世間知らずだから、恋なんてまだ早いと思うんだ……」

義道は、俺に向き直り、そんな事を呟いた……

と同時に、俺に楽譜のようなモノを差し出した

「……これって！千早の」

「探してたんだろ？何か知らないが俺んここに置いてあった……」

「……わあー、サンキュー義道！」

俺は楽譜を受け取ると、急いで千早の元に向かった……

「……サンキュー、か……まっ後は社長がうまくやってくれるさ……」

さて、俺は千早の楽譜を持って急いで事務所を降りて行った

「おーい！楽譜あったぞ！」

「っ！すみません！お手数おかけしました。帰りが遅いので、何か

あったのかと……」

「何か……ああ、確かに何かにあったな、変わった子に捕まっちゃってね、だけど、才能を感じる奴だった、アイドル候補生らしいけど、知らない子だったな」

「変わっていて、才能を感じる……それって、美希の事ですか？」

千早の質問に俺は、首を縦に振った

「知ってるの？」

「ええ、よく知っています。美希は、まだ正式なアイドル候補生ではありませんが私の目から見ても、才能の群を抜いています、少し世間知らずなところはありますが……時々、ハツとする程人を引き付ける歌を歌います、天才型の歌い手ですね」

「お前だってアミバ……じゃなかったトキ……でもなかった……お前は天才だろ？」

俺は千早にそんな事を言ってみた

「いえ、よく言われますが、私は決してそうとは思いません。それに努力はしていますが、どちらかというと、努力型の人間なのかもしれません」

「そうか？でもお前にもちゃんと才能はあると思うぞ」

「ありがとうございます、でも正直な所、良い歌が歌えさえすれば、何だかっていいんです」

千早の言葉に、俺はアロマを吸いながら

「仲間と対峙しても……か？」

そう質問をした

「ええ、一度ステージに立てば、仲間とはいえ、皆ライバルです！美希とも、いつか存分に戦える日々が来ることを願っています、少し怖くも有りますけど」

「怖い……か、千早も怖いと思う事があるんだな」

「勿論です、負けたり失敗したりする事が怖くない人なんていません、不安を消すためには、努力しないと、もっともっと」

「……そうか」

そう言うと、俺はキセルの中のアロマの残り粕をトーントーンと川に落とした

「あっ！すみませんプロデューサー、私ばかり話をしてしまって」

「いいよ、それより、俺にも手伝わせてくれないか？お前の不安を消す為の努力を、レッスンとかで頑張ってさ、心を鍛えて、ダンスとかにも磨きを入れて、努力で裏打ちされた自信を手に入れるんだ！」

俺は、自分の拳を突き出してぐっと握りながら、千早にそう言った……

「努力で裏打ちされた自信……はい！よろしくお願いします」

俺は笑顔で千早を見て、千早も少しだけ微笑んだ

「では、今日はここで失礼します、お疲れ様でした」

「おう！またな……」

さて……寮に帰って見ると、朝と同じような光景が俺の目に映っていた……

しかも一人増えてるし……

「ううゝお腹が空きましたゝ」

「大丈夫よやよい、きつと誰かが美味しいご飯を作ってくれるから

……」

リミは俺をちらちらと見ながらやよいにそう言った……

「……お前ら……ったく、しょうがねえなあ！」
追い返す気力もない俺は、仕方なく今日の夕食を三人分作るのであ
った……

あと、千早の期待に応える為にも、俺も努力しないと……

慶次朗視点 初日 輝きの声（後書き）

さて、今回慶次朗編第二話が終了したわけですが

今回の千早の芸名決めのシーンは、営業とレッスンを混ぜた感じにして書きました

正直、PSPを見ながら書くのは少し辛かったです……

しかし！私は負けません！頑張ります

そしてここで一言言わせてください！

アクセス数600オーバー！

有り難うございました！

これからも、頑張って最後まで書きたいと思います！

アクセス数が1000を超えたら本気出す

ではでは！皆さん、また次回の後書きであいましょう

神崎誠視点初日 苦悩（前書き）

神崎誠（18）

身長 165.3 cm

体重 59.3 kg

趣味 読書、裁縫、ゲーム

家族構成

父と母のみの三人構成だが、家族全員が揃うことは滅多に無い

父、ビジネス企業の社長

母、医者

嫌な事 友人のコスプレ衣装の試着

担当アイドル 菊地真

神崎誠視点初日 苦悩

僕は、今日からプロデュースをすると言うことから、自分の寮室で、先生から貰った『よもつちの心得』何て酷いネーミングセンスの本に目を通していた

アイドルプロデューサーの心得一

（担当アイドルの心を掴むべし）

プロデューサーとそのアイドルは、お互い信用と絆を持っていないとは話にならない

しかし、信頼するに置いて注意が必要なのは会話だ！

例えば、君のコンプレックスを逆にしたような子の場合、君はその子と話す事はタブーだ！

相手は私と同じ女！間違っても男の子と勘違いしないように！

確かに、あの子……真の写真を見て、僕も最初は男の子と思ってしまった……

彼女は、僕と同じ……それを僕は一番知っている

まあ、心得については後で読むとして……僕は、僕で真に会わないとな

そんなことを重いながら玄関のドアを開けようとした……

ガン！

ドアノブは触っていない

なのに突然ドアが開き、僕は玄関前に顔を思い切りぶつけた

「やったー！ドッキリ大成功！」

「すごいよ真美！これで連続三人抜き！新記録だよ！」

僕が倒れてる目の前でそんな事を言っているが、流石にこればかりは僕も許せない、久しぶりに……

「イエーイ！この調子で次の兄ちゃん達にも歓迎しようよ！」

「そうだね！そうすれば亜美達と兄ちゃん達の仲良し度も――」

「あがらねえよ……」

ポカッ！

「まったく……亜美と真美の奴、また何かやらかしてるに違いない、新人にこの事を伝えないと……って……」

「……」

「……」

「……」

僕の眼下には、頭にたんこぶを付けた双子の女の子がいて、二人は正座をしていた

「なっ……何やってんだ？二人とも」

「見ての通り、反省です」

「はあ？反省？……まさか」

「ええ、この通り見事に顔をぶつけまして……今その説教をしていたんです」

僕は、この子のプロデューサーらしき人に、笑顔でそう言った
先程の二人、双海亜美と双海真美はそれを見て背中をビクツとさせた

そう、僕は滅多に怒ることはない……

しかし、僕にも許せる事と許せない事と分けられるモノはある
亜美と真美のやったことは、たまたま許せない事だった……

彼女達の手荒い歓迎に、他の二人も怒っただろう……

「す……すまねえ！俺が見てない所でそんな……」

「大丈夫、もう同じ事は繰り返さないよね？二人とも」

「う……うん！ゴメンね兄ちゃん……」

「亜美達、今回の事は反省するよ、ごめんなさい」

「よし、それじゃあ、立っていいぞ」

そういつて、僕は座っていた二人に立つことを許した

「うえーん！兄ちゃん！怖かったよ！」

「亜美も亜美も！あの兄ちゃん、めっちゃ怖かったよ！」

亜美と真美は、彼女達のプロデューサーらしき男性に泣きついた

「ったく……もとはと言やあお前らが悪いんだろうが！しかも新人相手に……」

「新入り……って事は貴方は前からここに居たんですか？」

「ああ、一年前ここに就いた……俺はこの二人のプロデューサーの
砦^{とりで}川聖だ、よろしくな！」

そういうと、聖は親指を立ててよろしくと合図を送った

「うん……よろしく」

僕も彼と同じ動作をし、お互いに笑った……

「社長……」

僕は、社長室に入った……

ちよつとした疑問を聞くためだ

「おや、神崎君じゃないか？どうかしたのかね？」

「いえ、この事務所に、プロデューサーは何人いるのかって……」

「ほほう、もしや、君は砦^{とりで}川君に会ったのだね……」

「ええ……とても苦勞人って感じの人でした……」

「そうかいそうかい、実はな、この事務所には、君達を含めてプロ
デューサーは十人もいるんだ」

「じっ十人!？」

僕はその数を聞いて、目を丸くした
十人なんて、すごっ……

「人手なんて足りてるじゃないですか！」

「足りているには足りているのだが……三人分の空気があってね……」

「丁度君達がその三人というわけだ」
なるほど、僕らは運が良かったって事か……

※

さて、僕は社長から、真がいる場所を聞いて、その場所に言ってみ
た……

そこはいつも僕が行くスポーツジムだった

「よお神姫、またトレーニングか？」

「管理人さん、今日はちょっと用事があったて来たんです、待ち人……
…ですかね？」

「おっ！神姫、お前にも恋人が出来たの……がぁ」

僕は、思い切り管理人の顔を、ゴングで叩いた……

強烈過ぎたのか、倒れた管理人を他所に、僕は彼女を探した……

「いててて、やっぱ連続ターンは無理か……まだ頭が痛いや……」
僕は、声のした方向を見ると、そこには確かに、この前僕にぶつか
った女の子がいた……

菊地真

僕と正反対の女の子だ

確かに、顔だけ見れば男の子に見られてもおかしくはない、しかし僕は彼女のプロデューサーとして、何より進路の為に一步踏み出し

「ちょっと良いかな？その……可愛いキミ？」

何て言ってみた……明らかに視線が僕の方に集まってくるのが判る

……

「えっ！もしかしてボクの事？や、やだなあ、ボクが可愛いだなんて……あっはははは」

照れているので、女の子間違い無し、よし！

「ところでお姉さん、誰です？」

「……うわああああああ！」

お前に言われたくは無いよ！

僕の心は、完全に傷付いた……いやマジで今の発言は無い……

「えっ？えっ！あああ！もしかしてお姉さん、あの時の！」

「ひっく……僕は、ぐす……ちゃんと男の子なのに……境遇が同じかと思ってたけど、こればかりはあんまりだあ！」

「うわあ、ご……ごめんなさい！ボク、てっきり女の人かと……」

「……僕だって二日前、君とぶつかった時に、君を男の子かとおもってた……」

僕と真は、鏡でも見るようにお互いを見た……

「それに、僕は君の担当プロデューサーだ、名前は誠、神崎誠だ」

「うわあ、ボクを逆にした感じで、何だか鏡でも見ているような感じですよ……それに……担、当？ええ！それじゃあボクデビューが決まったって事ですか！やーりい！」

真は、喜び、思わずガッツポーズなんかとっていた、僕も彼女をみて、笑顔で微笑んだ……

「ボク、これからバリバリ頑張りますんで！よろしくお願いします、プロデュー……」

「待って！僕の事は……誠じゃややこしいから、神崎でいいよ。その方が僕も良いし……それじゃあ、たしか社長はあったらすぐに芸名を決めろってたな……」

「プロ……神崎は良い芸名を知ってるの？」

「そうだなあ……」

真……僕……

ボーイッシュ……ガリッシュ

女で男……男で女……

そうだ……あったじゃないか！

あの名前が……

「……サイユ」

「えっ！神崎、今何て……」

「ベルサイユだよベルサイユ！！そう……まさに君はオスカルだ！」

僕は、真の肩を叩いてそういった！

「ベルサイユか……それで決まりなんですネ！よし！頑張るぞ！」
そして真と僕は握手を交わし、僕らのプロデューズはこの行きつけ

のジムの中で始まった……

僕と真は、ジムの休憩所を借りて、ミーティングをする事になった……まあここしかミーティングする場所は無いんだけど……

「ミーティングかー、き、緊張するな……。ボクのどんなことから、話せばいいですか？」

「それじゃあ……真の年齢から教えてくれないか？」

まあ、今は人が入って来ないから大丈夫か……人が入ってくるそれまでに、少しでもコミュニケーションをとっておかないと……

「わっかりました！今年16歳になったばかりの、高校生です！……と……アイドルが年齢の事をあんまりべらべら喋るのは……良くないですかね？」

「構わないよ……君の履歴書に目を通してあるから、一発でわかることだし」

ただ……彼女は僕と二歳しか変わらないと言うことにはビックリしたけどね……

「あはっ！それもそっかあ……神崎には何でもお見通しって事ですか」

「まあね……、ところで、さっきダンスの練習をしてたみたいだけど、君は踊りが好きなのかい？」

「はい、とは言っても、まだ見られたモンじゃないんですけど、とりあえずは体力だけで……いつか上手くなって、歌番組とか大きなステージで華麗に踊りたいよなー、なんて」

「まあ、そういう舞台に立つ事は、女の子の夢、だもんね」

僕は笑いながらそう答える

「へへっ！そうです！誰もが抱く憧れってヤツです……よーし！これから頑張って男の子に騒がれる存在になるぞー」

「ちょっと待った！」

僕は、顔を真に近づけて今の発言に異議を唱えた

「ど……どうしたんだ神崎……」

「確かに男の子のファンも必要だけど、今は無い……」

「えっ！？そ、それってどういう意味です？」

真は困惑した表情で僕を見た

理由は簡単だ……

「男受けは期待できない、その……あまりちやほやされるようなタイプじゃなさそうだからさ……」

そう……僕はコンプレックス故に、女性ではなく、男性にちやほやさせる事が多かった……

それに、本気で告白された事もあるし……

「ぐっ……それって遠回しに、ボクには女としての魅力が無いって言ってませんか？」

「そんなことは無い、むしろ僕は君と同じような経験をした事がある、それも沢山……これが証拠だ」

僕は、真に四枚の写真を渡した

「えっ……嘘、これ全部……神崎の……」

「そうだ、僕さ、女の子の様な顔つきをしてるだろう？だから、よくメイド服とか着せられて、こんな事を……こんな……コンナ……」

あはははは！」

自分で自分のトラウマスイッチを入れてどうする！

「わああ！ごっごめんよ神崎、で、でも……やっぱりそれってボクには女らしさが無いって事ですよね……うう……どうせ僕は男女ですよ……」

「あはははは……ふう、やっと戻った……でも、お互いに頑張ろうよ、そうすればきっと……」

「ボクも……女の子らしく見られる時が来ますか？」

「うん！僕を信じろ！」

そう言って僕は胸に拳をどんとあてる

「……わかりました！ボク、神崎を信じるよ！だから……」

「僕も君を信じる！これから、よろしくな、真！」

「うん！よろしく！神崎」

危うくギスギスしちゃう所だったけど、何とか回避できたし、よし！明日から本格的にプロデュースが始まる、彼女の夢を果たす事と、僕のコンプレックスを克服する為に、頑張るぞ！

そう言って、僕は真と拳をぶつけ合い、お互いに信頼を得た……

その後、僕と真はジムでのミーティングを終え、彼女とちよつとジョギングをしていた……のだが

「あちゃー、早すぎたかな……はあ、しばらく待つか……」

真を追い抜いてしまったみたいで、僕は一人、自販機のコーラを飲んでのんびり彼女を待つことにした……

その時だった……

ガサガサッ

「んっ？何だ……ハム……スター」

そう、僕の目の前に、ハムスターがいたのだ

そのハムスターは僕の足と言う名の崖を登り、肩まで昇って行った……

「……可愛いな……ふふっ」

僕はハムスターに手を伸ばそうとしたその時だった……

「動かないで！」

「っ!？」

僕の手は、その一言で止まった……いや、止まらざるおえなかった後ろを振り向くと、後ろには腰に手をあてて仁王立ちをしている女の子がいた

どこかの学生……いや、あの制服は明らかに僕の学校の制服だ……とにかくそれを付けた気の強そうな女の子は、僕に近付き……

「……良かった……やっと見つけたって……アンタ……」

ハムスターを自分の頭に乗せた後、僕を

睨んで来た……

彼女は独断寺茜

勝手気ままな副生徒会長で、その勝手ぶりからドグマ（独断）の愛称で呼ばれている

ただ、いつもドグマは僕を見てパパがうんたらかんたらって言うって突っ掛かってくる時がある

「誠……貴方、学校に行かないで何しちゃってるワケ？」

「ドグマ……いや実は僕、学科を転属させられてね……先生の我が儘で……」

僕は、冷や汗をかきながらドグマにそう告げる

「へえーあのよもつちがね……そりゃあアンタはアイツの一番の教え子よ、そこは認める……でもね……」

ドグマは眉間にシワを寄せ……

「パパの仇なのは変わり無いの！」

何て僕に言った……待て……今仇つつたよな……えっ？

「ど……どげんこっちゃ！僕が君の父さんに何をした！」

「した……したわよ！私のパパを……貴方のお父さんは私のパパを殺し……」

「ドグマ！ハム蔵見つかったか？」

「おっと……そうだ、仇討ちよりアタシはハムスターを探すのを優先してたんだ……命拾いしたわね……」

……たっ助かった……

僕はその場にへたりこみ、安堵の溜め息をついた

だが、僕はドグマの横にいる、少し日焼けしている女の子を見た

「おお！君がウチのハム蔵を見つけてくれたのか！サンキュー！」

「しかし、ビッキーもよく動物を逃がすわね……前は鳩を逃がして、次の日はアライグマ、sonでもってまた次の日はパツクマンを逃がしたもんね……しかも」

ドグマは笑顔を見せながら

「どれも食い意地がはった結果だもんね、鳩の時は豆を、アライグ

マはピーナッツ、そしてパックマンはパワーエサ……そしてそれに追加でカゴの管理」

何て硬いことを女の子に言っていた

「あっ……あれはしょうがないんだぞ！だって、ハト子やアラ丸、それにパク朗はどれも美味しそうに食べてたからつい……」

「ぷっ……あははははは！」

そして、気付けば僕は大声で笑っていた

「なっ……なんだよ青年！何が可笑しいんだ？」

「へっ……今君……青年って……」

「うん……言っただぞ」

ああ……こんなに嬉しいことはない！

僕は、初見の人に始めて男の子と言われた！

アムロ……お前もそんな気分だったのか……僕にも、帰れる（思われる）場所（事）があるんだ……

「……有り難う」

気付けば僕は、女の子の手を握って、何度も頭を下げていた

「でも、君ってなかなかドジなんだね。あはは……何か久しぶりに大笑いしたよ」

「むかー！そんなに自分を笑うな！」

女の子は頭を抱えて僕を睨みながらそう言った……

「ごめんごめん、別に悪気は無いんだよ……ただ、本当に久しぶりだなんてさ」

「久しぶり？君は笑う事が少ないのか？」

その質問に、ドグマは懷から写真を取り出して、女の子に見せた……

その写真は、二年生の修学旅行の時の写真だった

僕は強制的に博霊○夢風の神子装束を着せられ、そのまま集合写真に納められてしまった日の写真なのだ

「ええ！これ全部君なのか！？」

「そうだよ、この神崎誠って女男は、顔が女っぽいからよくこんな事をさせられているのよ」

「へえー、でも君、誠だっけ？君だって普通にしていれば——」

「普通にしているさ……」

「へっ？」

『普通にしてるつってんだろ！あつたばかりのお前に俺の何が判るんだ？確かに初見で男の子だと思われた事は嬉しかった……だが、俺は10年間、辛い思いをしてきたんだ！最初は可愛いからってちやほやされる事が嬉しく思ってた、けどだんだんとあれ着ろこれ着ろって強制をされて、その写真を勝手に売り物にされて、だんだんと人と関わる事が少なくして来たんだ。しかもそっちはそっちでパパパパうるせえんだよ！パパの仇？俺がいつてめえのパパを殺したんだ？それを詳しく一字一句間違えないで話せんのか？それとも、俺が何かしたか！！』

純粹に言った言葉とはいえ、過去の経験から、僕にはそれが苛むようにしか聞こえなかった

なぜ僕は怒ったのだろうか……

何故突然あった女の子に逆上してるのだろうか

何で僕が苦しまなければならぬのだろうか

そして、僕は、自分の言った事に気付き

「……ごめん、今日はもう帰らせてくれないか……」
と二人に言い、逃げるようにして去って行った

「……なあドグマ、自分、何か悪い事言ったか？」

「響は悪くないよ……けど私も言いすぎた……かな」

二人は、僕の言葉に、少しだけ反省の表情を見せ、その場を去った

（またやってしまった……どうしてこう荒い言葉で他者を傷つける事を吐いてるんだ……くそ……）

僕は砂浜で月を眺めていると――

「……困り事かい？」

横から紳士の雰囲気の男性が現れた

「僕なんか、アイドルのプロデュースなんて出来るでしょうか？」

「どうしてだい？」

僕の質問に、男性は優しくそう答えた

「何だが、僕に荷が重過ぎるんです、何と言うか僕、人と接しているとロクでもない事ばかり起こるんです」

「そうかい？では一つ聞こう、それなら何故私に話し掛ける？」

「……それは貴方が話し掛けて来たからじゃないですか」

「……そうだな」

僕は、その男性は何故か信用できると思えた

「貴方は、765プロのプロデューサーの一人ですか？」

「よく判ったね、どうしてだい？」

「いえ、何だかこんな人、居そうだな〜って思いました」

男は少し黙った後、僕に向かい手を差し延べた

男は、前髪をワックスで後ろに固め、右目には切られた後があった

「私は、伊達真夜^{おだや}、担当アイドルは――」

（神崎ー！）

（プロデューサーさーん！）

真夜さんと僕は、声のした方向を向いた

そこには見慣れた女の子と、大人の雰囲気醸し出してる見慣れない女性の姿があった……

「真、それに……貴女は？」

「彼女が、私の担当アイドルだ……」

真夜さんは、そう言うと言の隣にいた女性は行儀よくお辞儀をし

「始めまして、三浦あずさと申します、以後、よろしく願います」
と自己紹介をした

「神崎……誠です、よろしく願います」
僕も、あずささんに自己紹介をする

「ふむ、私は君を神崎と呼ばせてもらおう、同じ『まこと』じゃやこしいの……」

真夜さんはそう言うと、僕に近付き

「さつき君は、アイドルをプロデュース出来るのか？と言ったね？」
そう、質問をした

「はい、僕には荷が重過ぎる、何だか失敗するのが怖いんです……」
「どうしてだね？」

「みんなの期待に答えられなかった事や周りの目が怖くて……」
「……それは私も同じさ、いや……私だけではない、君達を含めた
十人の765プロのプロデューサー全員が同じ恐怖心を持っている、
君はその恐怖に打ち勝て無い訳では無いだろう？」

「……」

黙り込む僕を見て、真夜さんは僕の肩をポンと叩き

「怖いのは最初だけだ……自信を手に入ればそんな物はただの飾りだ」

とそう呟いた

その後、僕と真はあずささんと真夜さんの二人と分かれ道で別れ、
僕は真にさつきまでの事を話していた……

「へえー、動物を探してた女の子か、神崎って優しい所があるんだね」

「まあね……」

「けどさ、何だか神崎って無理をしてる様な気がするんだ」
「無理？」

真の言葉に、僕は首を傾げる

「うん、神崎って何だか仲間を巻き込みたくないって雰囲気が強くて関わりとか持たないのになって……」

「……そうだよ」

僕は静かにそう言った……事実を

「僕の両親、二人とも滅多に帰ることが無いからさ、母さんは朝から深夜まで病院で医者やってるし、だから結果的に僕一人が家の事をしなきゃならないんだ……それに、友達はあるべく作りたくは無いんだよ、僕の事で、友達が巻き込まれたり、嫌な思いをされるのが……」

そうだ、僕の周りはいつも相手は純粋に可愛いとかキャーキャー言ってるけど、僕にして見れば、これはコスプレと精神的攻撃と言う全く新しいじめだ

僕は何を思ったのか、石垣に頭をぶつけはじめた

「か……神崎、やめなよ！そんな事したら神崎が——」

「僕が何をしたらってんだよ！何で僕だけなんだよ！畜生！畜生！俺がいなけりゃ良いのか！俺の存在がそんなに愉快か！俺がそんなに珍しいか！畜生！畜生！畜生！畜生！——」

どんどん石垣に頭をぶつける勢いが増して行く……

「神崎！！そんな事したら本当に神崎が死んじゃうよ！」

「うおおおおお！」

真は、これ以上は俺が危険だと見て、急いで羽交い締めにし、石垣から体を遠ざける

「離せ！離してくれ！俺は！俺なんかどうせこのまま——」

「あ？このまま何だって？」

「っ！？」

俺は声がした方向を見た

そこには、キセル型のアロマパイプを吹かしている前田慶次朗が立っていた

「お前さ、自分ばかりって思ってるけどさ、やめなってそう言うの」
「……うるさい、うるさいうるさいうるさい！お前が俺の苦労なんざ知るはずないクセに、知ったような口を——」

「真ちゃん、しっかりと腕を掴んでて」

真は頭に？を浮かべながら慶次朗の言う通りにし、慶次朗はアロマパイプを吹かした後、パイプを逆手に持ち替え

トーントーン

と二回鳴らした……

その後に俺は、何かに殴られた様な感じと共に、意識を飛ばされた

それからどうなったかは、覚えていない

ただ一つ判ることは、変わりたいと言う気持ち、そして真をトップアイドルにしたいと言う意志が、俺の心の中で芽生えた事くらいだ……

そう……俺自信を変える為にも……

もう、『女の子みたい』という理由でちやほやされない為にも……

俺は……必ずやり遂げる！

この仕事を！そして、彼女をトップアイドルに導く事を

神崎誠視点初日 苦悩（後書き）

皆様大変長らくお待たせしました！

いやあ、今回この章を出すまでに結構時間がかかりました

その理由が、今まで扱ってきたPSP1000が壊れて使えなくな
ったからなんです

今あるPSPを廃棄して、PSP2000に替えて、アイマスをや
ってみれば何と前盤と違って何てシャープ！

正直、買い替えて正解だったと思ってます

あと少しだけペルソナやデイスガイア2に浮気なんかしちゃったり
とか……

神崎誠視点は、主に、彼の成長と変化をメインとしたシナリオに設
定しています

さらに、たまにどのシナリオも、オフがあるときがありますが、そ
こは完全にオリジナルにします
（それに罰箱360持ってねえし）

それに、何か指摘とか感想とかあったらバンバン出して欲しいです
では、次回でまた会いましょう！

桂木結城視点 初日 関わる事（前書き）

桂木結城（17）

身長 160.5 cm

体重 59 kg

趣味

座禅、掃除

家族構成

父と母がいるが、現在絶縁中

口癖

OK、そいつは光栄だ

担当アイドル

萩原雪歩

桂木結城視点 初日 関わる事

「う……うーん……」

「気が付いたか？神崎……」

私は慶次郎から昨日の事を聞き、神崎の部屋に泊まる事となった……とはいっても、彼が目覚ますまでの間である

「……僕は、一体何を」

「お前、自殺しかけたんだってな……」

「っ!？」

彼は私の言葉を聞いて、驚愕した

「すいません桂木さん、僕なんかの為に」

「礼を言うなら慶次郎に言うんだな、アイツはお前の事を心配してたんだぞ、それと、私は呼び捨てでいいから」

「わかった……んじゃあ結城は全部聞いたんだな、慶次郎から僕の事を？」

私は神崎の質問に、首を縦に振った

「……僕、もともとはこんな口調じゃ無かったです、本当はもっと普通に喋りたいのに周りにはそれを許してくれませんでした……僕を男らしく見てほしい、僕はいつも近くの神社にお参りをしていました……ですが、周りの行き過ぎた感情はそれを束縛し、僕の心に徐々に大きな穴を開けていきました……」

「束縛か……私と同じだな……」

「……結城と？」

「ああ、私はこう見えて財閥の跡取りでね、だが父親は立派な後継者にしたい一心で虐待に近い教育をし、母はただただ心なく頑張り

なさいと喋るだけ……ただある日の夜だ、私は自分の部屋に戻るときに居間から流れてきた母の言葉を聞いてしまったんだ……『所詮あの子は財閥維持の道具だ』ってな……」

私は神崎に真剣に過去を話す

「私は流石にキレたよ、それじゃあ私は何のためにここにいるんだってさ……そして私は家を出て行ったんだ、それからしばらくして私はこの町に住む神社の住職さんが引っ越すと聞いて、その神社を貰ってな……君がお参りしていた神社……ありゃあ私の家だ」

「……そうだったんだ、結城にもそんな辛い事があったなんて……それに比べて僕は何だ……昨日やった事が、本当に惨めに思うんだ……どうすればいい、僕は……一体どうすれば……」

私は、涙を流す神崎に近付き

「一人で抱え込もうとするな、辛かったら、私や他のプロデューサーに相談するんだそして、自分に自信を持て！自分の道に、生き方に！」

つとそう言った

「結城……」

「後はお前次第だ、私はお前が目を覚ましたつつう訳でおさらばさ……んじあな」

そう別れを告げ、私は彼の部屋を後にした

しばらくして、765プロでは大きな騒動が起こっていた……

「社長のいじわる！ミキから大事な物取り上げて、ミキばかりダメだなんて！」

「待ちたまえ美希君！私は君の事を思ってたね！」

「もういい！こんな事務所、こんな場所！もう知らない！社長なんて大嫌い！」

「待ちたまえ美希君！美希君！！」

社長室から怒鳴り声となだめる声が飛び交っている

「ったく……何だ？朝っぱらから喧嘩か？ったくしょうがねえな……俺がふぁ！」

止めに行こうとした慶次朗は、鼻っ柱をドアに思い切りぶつけ、その場に倒れた

そして、社長室から勢いよく飛び出して来たのは

「美希ちゃん！」

星井美希

765プロ切ったの期待の新星で少々世間知らずなのがたまに傷の女の子だ

話には聞いていたが、確かに間近で見ると可愛いではないかしかし、彼女は目に涙を浮かべて私や周りのプロデューサーを見る

「ちゃーっす！今日も一日、よろしくお願いしま……す……」

彼女の前のドアから、遅く来た義道が現れ、彼女は彼を見て

「キョウスケ……さよならなの……」

と言って勢いよく事務所の階段を駆け降りた

「おい！待てよ！何があったんだ……待てってんだろ！」
義道も彼女を追い掛けて走り出す

そして、降りてみると、既に二人の姿は無く、仕方なく戻ろうとした瞬間

「いやあ、二人は何て足が速いんだ……」
社長が私の目の前にいた……

「社長、何かあったんですか？」
「いやあ、実は美希君がプロデューサーを変えたいと言って……
まあ、二人ともきつと暫くしたら戻ってくるさ」
社長は笑いながら少々不安そうな声でそう言った

ただ、私の空耳だろうか？

社長の声で
「頼んだぞ」と言う言葉が聞こえて来たのは
もしそうなら……今は触らないでおこう
そして、いずれ真実を語ってもらおう

しばらくして、私は雪歩に会うべく社長から彼女の居場所を聞き出し、そこに向かったのだが……

「……」

「……」

私の目の前には、無表情の少女がいる
しかも彼女の肩には何か小さな小人のような生き物と……

「ゆっくりしていったね!!」

彼女が抱えている饅頭のような生き物がいた

女の子は、肩の生き物を饅頭のような生き物の上に乗せて、何かを待っている

「……君は誰だい？」

「……」

女の子は口を開かない

「ゆっくり! ゆっくり! ゆっくりは佩音の友達!」

……代わりにこのゆっくりと呼ばれる生き物がそう言った

「……佩音^{はるね}ともよ」

ゆっくりを持ってる女の子……ともよは自分を名乗り

「……この子……いお」

ゆっくりの頭の部分でキーキー言ってるいおと呼ばれた小さな生き物を見て言った

「あ……桂木結城だ、君は誰か待ってるのかい？」

私はともよに質問すると、彼女はいおを持ち上げ、私の前に出した

「……本人」

「……」

意味がわからねええええ！

「あ……あのさ、それじゃあよく解らないんだけど」

「解らない？伊織を知らないの？馬鹿なの？」

私の発言に、ゆっくりはゲラゲラ笑いながらそう言った

「伊織？おい饅頭、その伊織ってのは誰だ？」

「ゆゆっ？伊織を知りたいの？どうしよかな～教えようかな～やっぱり教えな――」

「伊織……水瀬伊織……」

「ゆゆっ！！」

ともよはゆっくりをぐにぐにと上下にこねくり回しながら私に言った

「ほお、水瀬伊織か……げエ！」

私は水瀬伊織と言う名を知っている

彼女は水瀬財閥だったかな？とにかくそれのお嬢様だ
家族との絶縁前は、何度かその財閥と対談をする所を見かけたが…

…今の私には関係ない。

「伊織……私の担当アイドル。だから……今待ってるの」
ともよはゆっくりといおを地面に置いて、二匹（！？）を彼女の目の前で遊ばせた

「ゆっ！今日こそゆっくりが勝つからね！今度こそ負けないからねっ！」
ゆっくりが長ったらしい話をしている間に、いおはゆっくりの頬の部分に思い切り噛み付いた

「ぎゃあああ！」
ゆっくりはともよの周りをぴょんぴょん跳ね回り、いおはキーキーと鳴いてゆっくりにかじりつく
ともよは二匹を無視してこっちを見ている

「……私の顔に何かついてるのか？」
「ううん、ただ……似てるなって」
「似てる？ 誰にだ？」

「生き別れの……お兄ちゃん」
「へえー、そいつは光栄だ。」

私はともよの頭を撫でると、彼女は無表情のまま、頬を赤らめた

「では、私は失礼するよ……これからよろしくな」
私はそう言ってもよに別れを告げて去るが、少しだけ振り返って見ると、彼女は初めて私に笑顔を見せてくれた
もちろん私も笑って返す。そしてその後に私は本来の目的を果たすべく、彼女を探した……何故なら

※

「買い物に行ったきり帰って来ない？」
「そうなんだよ、今日私は彼女に買い物頼んだんだが、何かあったのかもしれない。早速だが迎えに行ってくれないか？ 活動はその後だ」

※

そう言った理由で私は今商店街を走っている……

「確か、この辺だったはずだ……おっ！ いた」

私は足を止めて、昨日知り合った女の子、萩原雪歩を見た

「うう、ぐす。あの犬、吠えたりしないかなあ。ここを通らないと、帰れないのに……」

（それチワワだぞ？ あんなのが怖いって……まあいい、とにかく

今は目的を果たそう）

私は雪歩に近づき

「おーい、どうしたんだ？」

と軽々しく言った……というか、私と気がつくだろうか？

プロデューサーになってから、髪を切り、神社の服を防虫剤入りのクローゼットの中に入れ、本来の私服に着替えたのだ

昨日は神主の服を着ていたからアレだったが……今は私服だ。多分……

「え！？ あっ、すみません。ここに立っていると、邪魔ですか？」

「いや、そういうワケじゃない。挨拶をしておかないと……ってな」

「あー、あなた……どなたでしょう？もしかして……なっ、ナンパ屋さん？」

ビンゴ！的中だ。雪歩は私だと解らない

「はぁ、そんな風に見えるか？私は……君のプロデューサーの、桂木結城だ」

「桂木……結城」

彼女の頭に？が浮かぶ。私はため息をつき、懷から一枚の写真を取り出すと

「これを見ても、私が解らないのか？」

っと彼女に写真を見せた

その写真は、私が神主の格好をしている服で、雪歩はそれを見て、私を見てを繰り返す

「あの時の神主さんが……プロデューサー？ ええっ、それじゃあ私、デビューすることになったんですか！？」

「そういうことだ、社長に頼まれて君を迎えに来たんだ……」
ふう……やっとなつてくれた

「ううう、どうしよお。やめにしませんか？ やっぱり私なんか、

成功できるはずは……」

「弱気だなあ、そう縮こまんなって。君だってアイドルになりたいんだろ？」

「それは勿論……わ、わかりました。なんとかついていく事にします！」

「OK。それじゃあ、まず……芸名を決めよう、そうだな……」
私は頭の中で沢山のイメージを作った

ハイウェイスター

何だそりゃwwwwww

彼女はそんなに元気キャラではない。だからこれは却下つと

スノーステップ

中二病全開だなあ……しかもしょぼいし

これだと彼女も嫌な気分になりそうだからこれも却下つと

後は……んっ？

自分……変わりたい……

なりたい自分

しゅごキャラ……っ！

その時、私はあるイメージを掴んでいた
本来の自分、変わりたい自分……

「……あむ、何てどうだ？」

「あむ？　どういう意味ですか？」

「ああ、とある人物の事さ……外ではクールなキャラでも、本当はそんなキャラじゃない、本当の自分になりたいと……つまり変わりたいって思ってたのを思い出したんだ……」

彼女は、私の話を聞いて、成る程と相槌を打った

「その名前で行くんですね。うう、名前負けしそうですね、頑張りますう！」

「ああ……よろしくな。さて、いよいよ活動開始だ……と言いたい所だが」

「犬がいて、この道は通れません……」

「……だよな」

※

さて、雪歩を犬から放し私達はやっとの事で事務所に戻ってきた
そして私は、事務所の会議室を拝借し、そこで彼女とミーティング

をすることになったのだが……

「ミーティング、ですね……よろしくお願いします」
相変わらず彼女は弱腰であった

「何で遠くにいるんだ？それじゃあ話が出来ないじゃないか」

「わ……私、男の人と話すの苦手で……あとどのくらい近づけば、普通に話、出来ますか？」

「大股で三歩くらいだ」

「わ、わかりました。それじゃあ……これぐらいで、いいですか？」

「OK、ナイスな距離だ。ところで、雪歩は今いくつなんだ？ 中学生？ 高校生？」

「これでも、いちおう、16歳の高校生です。……しっかりしてなくて、すいません」

「何故謝る？その弱気な性格は生れつきなのか？」

「はい。だって私、人に自慢できるようなもの、ほとんど持ってないし……なのに、アイドルになりたいなんて、その、夢、見すぎですよ？」

……どうしてそうマイナス思考になるんだよ

私は何だか彼女が可哀相を通り越して呆れていた

「夢見すぎでも、別にいいんじゃないの？雪歩は見た目がのんびり系だけど、着実に進めばいつかはトップに行けるハズだぜ？」

「あっ、確か童話でもありましたよね、確かその童話のタイトルは……」

「ウサギとカメだっけ？」

「そうです！ あのカメみたいに少しずつ進んで、前のウサギを追い越すしかないですね……でも私、競争相手に追い付く前にダメになるかも。大変な事、沢山ありますよね？」

「まあ、そりゃな。人生山あり谷ありつつうもんな……」

「不安です……何だか壁にぶつかったらコロンって、転んじやいそうで」

「安心しろ、もしそうなりそうだったら、私が雪歩をサポートしてやるから」

「あ……守って、もらえますか？ なら、少しは安心できるかも！」

あ、あの……いい人に受け持ってもらえる事になって、私、よかったです！」

彼女は、心からホッとした顔で、私を見た

どうやら、彼女の性格改善にはかなりの気合いがいるそうだ……

OK、私は最初から覚悟を決めているさ

「そうだ、私の事は結城で頼む。私はプロデューサーの立場だが、アイドルとは同等な立場で話したいからね、

「さん」付けもやめてくれ」

私は、雪歩にそう言って握手を求めた

「はい……じ、じゃあ……よろしく、結城君」

「よろしく、雪歩」

彼女はぎこちなく、私と握手を交わして、私達の活動は幕を開けた

……

※

さて、私はあれからいろんな事を考えていた……

（雪歩、はかなげな所と笑顔が魅力的な子だが、かなり気が弱い所があるんだよね……ふむ、大丈夫だろうか……）

「ぷ……結城君〜！」

（トップに立つ……それはそれなりの覚悟と実力が必要だ。だが、彼女の場合優しさが弱点になるな）

「結城君！ あ の、ま、ま、待ってくださーい〜！」

「んっ？ その声は……」

私は後ろを振り返ると、そこには息を切らした雪歩が立っていた

「はあ、はあ……ゆ、結城君って、歩くの速いですう」

「すまない、少し考え事をしていてね……ところで、わざわざ追い掛けて来るなんて、どうしたの？」

「は、はい。結城君とは、これから一緒に頑張っていくんですから……早く普通に話せるようになった方が、いいかなって思って、あの……」

ほお、そうでも無いみたいだ。だったら、私も雪歩の頑張りに応えな
いとな

「OK、雪歩。じゃあ歩きながら色々な事を話そうか」

「は、はい！」

※

「ほお、雪歩は真と仲が良いのか」

「は、はい！ でも、他の皆とも仲良しですよ。皆、いい人ばかりです」

「そういえば、神崎の担当はその真だったな……あの後、確かジムで自主練をしている所を見ていたが、確かにありゃあ見た目が男だ……男装の麗人ってヤツか」

「でも……美希ちゃんが事務所を飛び出した事は、今知りました。一体何があったんですか？」

「……ちょっとした喧嘩らしい、あの後義道が追い掛けて行った見ただけ……帰ってくる気配は無いんだよ」

「そうなんですか……」

「話が変わるけど学校では、どうなの？」

「ふ……普通です」

「へえ」

「……」

「……」

か……会話が續かない！
まるで告白しかけの中学生じゃねえか！
話題、話題……あっ！あった

「そういえば、雪歩に携帯電話の番号教えてなかったよね？」

「け、携帯ですか？ はい。そういえば、まだ……」

「何かあったら、すぐに連絡出来るようにしとかないとな。メアドも教えとこうか？」

「はっ、はい！ それじゃ私も………ああっ！ わ、私の携帯、事務所に置いて来ちゃってました………今日は色々な事があって、頭が真っ白に、なっちゃってましたから……」

「そうか………なら私がひとつ走り取ってこようか？」

「えっ！ い、いいです。私が悪いんですから、自分で取ってきます」

「そうか？ 遠慮はしなくていいんだぞ、たいした距離じゃないし」

「で、でも……私、やっぱり、行ってきますう」

「あ……おーい！」

私は止めようとするが、時既に遅く、彼女は事務所に戻っていった

「仕方ない、とりあえず待つとするか………綺麗な月だな………んっ？」

私は、ふと海岸沿いの浜辺に映る人影を見た

「何だ？ 気になるな………ちょっと見てみるか………こんな時間に一体？」

私は、こっそりとその人影に近づき、その様子を見ていた

「『見れば、世間心細くあはれにはべる。なでふものをか嘆きはべるべき』………本当に、私に出来るのでしょうか………いえ、そうでは

なく、せねばならない……そう、それが、生まれながらの、私の宿命……でも、私は……誰か……私を……うう」

（泣いている？あの娘、何かあったのかな？）

話をもう少し聞き取り易くしたいが為に、私はこっそりと歩いたのだが……

ガサッ

「げっ」

私の足元にゴミ袋があり、私はそれにつまずいてしまった

「っ！ なにやつ！？」

「……すまない、何だかつい、見とれてしまったね」

私は、月を見ていた女の子に顔を出した

私は初めてその女の子の顔を見たが……

綺麗な目をしている……こんなに美しい目は見たことが無い。彼女の魅力に吸い込まれてしまいそうだ

「怪しい者では、無いようですね」

「一応そのつもりだったが――」

「しかし、背後より黙って見ているというのは、悪趣味であろう？
恥を知らないさい！」

「（あろう！？ 恥を知らない！？）き……君の方こそ、誰なんだ？」

「私は別に、怪しい者ではありません！」

「だ……だけどよ、夜に一人で月なんか見上げて、それにそんな言葉遣いの女の子なんて、君は……くの一の役でもしているのか？」

「私は、忍びではありません！」

「たは……そうじゃなくてだな……」

「しかし、忍んでいる、という点では、同じかもしれませんね」

「何だか色々あるみたいだけど、変わってるな。君は」

「変わっている……よく言われます。もう少し、俗世に馴染まねばなりませんのに、いささか困りました……」

「ふむ……どんな事情があるのかは知らんが、そんなに思い詰めてどうする？ 口調が何だ？ 君には輝きがある、目を捉えて離さない何かがあるんだ」

「目を……」

「だから、そんなに思い詰めなくてもいいんじゃないか？ 自分を信じて楽にしてりゃあさ、きっと何とかなるさ……少々適当だがな」

「……」

「それと、私はナンパ屋では無い。これは助言だ、これをどう取るかは君次第だ。そこんところは誤解しないで欲しい」

「……ううっ！」

「えっ？」

「う、うええええ〜！」

（少し厳しかったかな……どうしよう、とりあえず泣き止むまで頭でも撫でてやろう……それがいい）

※

「ふ、ふう、やっと泣き止んでくれた……」

「……とんだ、ところを……ひぐっ、お見せして、しまい……ううっ……申し訳、ありません……本当に」

数分たって、女の子は泣き止み、涙を拭きながら私に向き直った

「まあ、少し驚いたよ……少し、厳しかったかい？」

「いいえ……」

「ではどうして突然……」

「……」

「うっ！私はまた何か変な事を言ったか？」

「……貴方様の、優しき言葉に触れたからです」

（あ、貴方様！？）

私は、きよとした……

だが、それより先に、照れが私の感情を独占し、私の顔は真っ赤になった

「私は、幼き頃より、あまり優しき言葉をかけてもらった事はありませんので……」

「そいつは大変だったな……」

「大変……」

「誰にだって、優しくしてもらいたい時はあるさ……子供の頃は、特に……」

「……貴方様は、真、優しきお方なのですネ」

「えっ？」

私は少しだけドキッとした

何故なら私は初めて優しい人と言われたからである……

この子の言葉に、嘘はない。だってこの子は……

私と……同じ……孤独だったんだ

「見ず知らずの私に優しく声をかけてくれる……ふふっ、今日は楽しい月夜でした……」

「そいつは光栄だ……そうだ、私の自己紹介がまだだったな。私の名は――」

私は、女の子の方を向くと、そこには女の子の姿は無かった……

「ゆ……結城君！どこにいるんですか？」

代わりに雪歩の声が聞こえてきた

さっきのは……夢だったのだろうか？

「雪歩！私はここだ！」

とりあえず、私は雪歩をここに呼んだ

「ううっ、やっと会えました。なかなか見つからなくて、どうしようかと……もしかしたら、今日の事は全部、夢だったんじゃないかって、心配で」

「ゴメンよ、さっきまでここに女の子がいてね……急にいなくなっただんだ……」

「…………え」

「どうしたんだ？急に真っ青になって」

「だ、だって……こんな人気のない場所に現れて、急に消えちゃったんですよね？ それって……ゆ、ゆ……」

「ゆ……ゆ……」

「ゆっくりしてってね……！」

「きゃあああああ！」

雪歩は、突然の声に驚いて、私にしがみつく。だけど、さっきの言

葉、どっかで……

「こ、怖いですう〜!」

「落ち着け雪歩、落ちツ……ケ……」

雪歩の腕が私の体に物凄い力で食い込み、それが限界まで行った時、私は気を失った

しばらくして、体にかかった圧力は無くなり、私は現実世界に戻された

「ゴフツ、危うく三途の川を渡る所だったぜ……」

「ご、ごめんなさい! 結城君、私に失望したよね」

「んっ?」

「私、嫌われないようにって、勇気を出して結城君を探したのに、結局……余計嫌われるような事を……うう、ひっく、ううう……」

「泣かなくていい、雪歩」

「で、でも……」

「だって、君はこんな夜道にも関わらず私を探しに来たんだろ?」

「は、はい……」

「その気持ちを知る私が、雪歩を嫌う理由がどこにある?」

「あの……本当に私でいいんですか? 後悔しちやいませんか?」

雪歩の発言に、私は

「んなもんするかよ! 私は雪歩が1番だと思っている! そんな私に選ばれたんだ、むしろ誇れ!」

つと言って彼女の額を小突いた

「……は、はい! えへへ、結城君っていい人なんですネ」

(いい人……かあの娘も言ってたな……私の事を、いい人って)

私は、家を飛び出し、自由を得て、沢山の事を学習した……

だが、いい人と言われたのは、初めてだ

こんなに、嬉しい事はない……

「結城君、私、もっと強い娘になれるように頑張りますから……明日からもよろしくお願いします」

「そいつは光栄だ……私からも、よろしくな」

「はい、それじゃ、もう遅いから、今日はここで」

「ああ、じゃあな、雪歩」

さて、私は寮の自室に戻ると、私のテーブルに、小さなテレビ一個分くらいの箱が置かれており、なにやらガタガタと音を立てて動いている

「なんだ？ イタズラか？」

私は、箱を開けてみると、そこには雪歩を小さくしたような生き物がいて、その手には、手紙があった

その生き物は私にその手紙を差し出して、私はそれを受け取った

差出人は、朝にあった佩音ともよだ……

彼女はの手紙には、

「結城、優しいからあげる」の文字と、ゆっくりの絵があった

「……決めた！ 私はトップを目指す、親を見返す為じゃなく、自分の意志で」

今日の出来事をきっかけに、私に大きな目標が出来た

例えその目標が遠くにあっても、私は雪歩と共に行く

カメの様に遅くてもいい

壁に当たって転んでもいい

その度に、立ち上がり、立ち向かい

越えていけばいいのだから……

桂木結城視点 初日 関わる事（後書き）

なんだから5様みたくgdgdな話になっちゃいました、ゴクトです

今回、はPROJECT UNLIMITED STARSについて説明します

今回の話の中に、ゆっくりと言うアイマスと関係ないキャラが登場しました

この小説に、時たま世界観の違うキャラやゲーム違いのキャラクターがたまに出るときがあります、そこはそこで一つの小ネタとして見ていただきたい！

次にともよが飼ってるいおですが

これはダウンロードコンテンツのぷちどるシリーズを引用しましたもちろん、次回の結城視点からはゆきぽも出しちゃいます

さて、次回のシナリオ何ですが、次回は共通視点として、三人共通の話になりますので、お楽しみに！
では、また次回で会いましょう！

共通視点 初日 謎掛ける作曲家（前書き）

佩音ともよ（16）

身長146・9？

体重49・2？

趣味 ペットの飼育、散歩、

家族構成

真田九龍（命の恩人兼保護者）

ゆっくりといお（ペット）

本来の両親は不明である

担当アイドル 水瀬伊織

共通視点 初日 謎掛ける作曲家

三人の新人がミーティングを終えて数週間が経った……

「へえー、ともよって色んなの飼ってるんだ？」

「うん、いお……この子寂しそうだっただから……私、拾った。次にゆっくりはぬいぐるみと思って拾って見たら……」

「実は生き物でした……ビックリだぜ」

結城は、事務所内でもよとサイダーを飲みながら、話をしていたその横で、いおとゆっくり……そしてともよがくれた生き物、彼はその生き物に『ゆきぽ』と名付け飼っていた

そのゆきぽは、ゆっくりをぽけーっと見ており、いおはゆっくりの上に乗ってスライムナイトのように手をビシッと突き出して遊んでいた

「でも、珍しいよね。ともよが俺以外の奴と話すのって……」

「九龍さん……」

「九龍？」

結城は九龍の顔を見て、ほおーっと頷いた

「おっ、あんたが結城つつうの？ 初めましてだな。俺は真田九龍ってんだ。気軽に九龍って呼んでくれや」

「ああ……だが、九龍ともよって？」

「九龍さん……私の保護者」

「へえー、保護者か……保護者だあ！？」

結城は驚愕の表情を浮かべ、二人を見た

「保護者っても、この子は俺が保護するまでは、孤児だったんだ。実はこの子の両親がこの子を捨てていなくなったんだ……そして、俺が見つけた時は橋の下で高熱を出してぶっ倒れててな……俺が介抱してやったんだ。そして彼女から訳を聞いて、俺は考えた結果……この子を保護することにしたんだ」

九龍は静かに結城にそう話した

「なるほど、九龍はつまり義理の兄貴って訳か」

「そういう事だ……それに……っ！」

九龍は、今事務所に入った誠を見て、口に手をあてた

「おはようございます。今日も一日よろしくー」

「まーこーとー!!」

誠は声の方向を見ると、九龍は嬉しそうな顔で誠に近づいた

「えっ？どちらさんで？」

「忘れたか？ 俺だよ、真田九龍だ。いやあーそれにしても、お前もアイツに捕まったんだな……ビックリしたぜ」

「あ、え、もっ、もしかしてお前、一年前転校した九龍か？」

誠も嬉しそうな表情で九龍を見た

「だぜ！ まさかまた誠に会えるとは思っても見なかったぜ。すははははは！」

九龍は、大きな声で笑う

すると、九龍の肩から何か小さな生き物がヒョコつと顔を出してきた

「？」

当然、誠はそれを見て頭に？を浮かべた

「こら、はるか。俺のダチがビックリするだろ？」

「おっ？ 九龍にも担当がいるんだな？」

結城は、はるかと呼ばれた九龍の肩にいる生き物を見て、こちらに近づく

「分かるか？　へへっ、実はともよは動物に懐かれやすい子でな、よく周りに生き物がいるんだ。コイツははるかだ、そして……」

（どんがらがっしゃーん）

「あそこで転んだ子が俺が担当するアイドルの天海春香だ」

結城は視線を九龍から春香に向けると、そこには豪快に寝そべっていて、頭には沢山の本や消しゴムなどが付いている女の子がいた。女の子は、起き上がって、頭やスカートをほろろと、九龍を見て

「あはは、やっちゃいました。プロデューサーさんと苦笑いをした

「何っつうか、ドジキャラだなあ……大丈夫なのかよあの子？」

「まっ、何とかするさ。ところで、今日は何か話があるって聞いたけど……」

それを見ていた慶次郎が九龍に質問し、九龍はそれを返すと、今度は九龍が慶次郎に質問をした

「確か、俺ら全員作曲家に挨拶に行くんだよな？」

「うん……社長、言ってた……」

「九龍は知らなかったのか？」

真夜が用件を話し、ともよが社長が言っていた事を告げ、誠が九龍

を精神的にトドメを刺した

「ぐあ！ 馬鹿野郎、俺はコイツの世話でてんやわんやなんだよ！」
九龍はかつか！と鳴いているはるかを持ち上げると、ともよはそれを見て慶次朗、結城、誠の三人を事務所の外に引っ張って行った
ともよは三人を休憩室に向かわせると、棚からティーカップ四つとティーポット、そしてティーパックを取り出して、それをテーブルに置いた

「九龍……多分水かけた……事務所、今頃大パニック」

「水？ アイツ、事務所途中で水をぶちまけたのか？」

「違う……九龍がかけたのは……はるか」

ともよは、注いだ紅茶を飲みながら慶次朗に言った

ふと横を見ると、彼女の足にはくつと鳴いている生き物と、結城が見掛けたゆっくりの帽子をかぶった版の生き物がいた

「……それは一体？」

「この子……ちひゃー」

慶次朗は、その生き物が千早にそっくりなのに気がついた。そしてそのちひゃーと目が合い、気がつけば慶次朗の膝にはちひゃーが座っていた

「ずるい！ まりさもその膝に座らせろ」

「お前……懐かれたみたいだな」

「……よく昔飼ってたペットを膝の上で寝かせたもんだ。これくらい慣れてるさ」

「ちなみにそのペットの名前は？」

「松風だ、ドーベルマンだけだな」

慶次朗はそんなノロケ話をしながら、ちひゃーを肩の上に乗せ、そ

の後に紅茶をグイッと一気に飲んだ

「……よかったら……あげる」

「えっ？もらっていいの？」

慶次朗の質問に、ともよはコクリと頷いた

「この子、伊織や担当アイドルの皆にそっくり……だから、担当アイドルに似たこの子達は……担当のプロデューサーにもらわれるべき……」

「……ふうん、だけどさ、何で僕らをここに連れてったワケ？」

誠の質問に、ともよはドアを指差した

三人はそれを見ると、驚愕した

ドアのガラスに、はるかがくつついている

しかも沢山の

窓越しに聞こえるかったか！かったか！の大合唱が、三人を戦慄させた
慶次朗の肩にいるちひやも、それを見て驚いている

「ギエエエエエ！何だありゃあ？」

「はるか……水をかけると、増える」

「何そのグレムリンのモグワイ見たいな設定は！」

「しょうがないね！こうなったらゆっくりまりさの力を見せてあげるね！」

四人がパニックっている中、ゆっくりまりさは勇敢にも、はるかの大群に向かって行った

ぴよんぴよんと跳ね回り、休憩室のドアノブを口で捻り、ドアを開けてはるかの大群の中に入って行った

四人と一匹はその様子をしっかりと見ていた

「ゆっくりまりさ只今参上！ ゆっくりして行ってね！！」
ゆっくりまりさは、はるかを中心に飛んで、そう叫んだが、はるかはそんなのお構い無しにゆっくりまりさに群れる

群れる

群れる

そして甘がみをする

「ゆっ！ ゆゆっ！」

当然ゆっくりまりさにして見れば、かなりのダメージである
もっきゅもっきゅと次々とゆっくりまりさに甘がみをするはるかに、
ゆっくりまりさは恐怖の表情を見せた

四人は、ゆっくりまりさが気を引いてる間に、慎重に休憩室を抜け
だし、急いで皆のいる事務室に向かって行った

しかし、代わりにゆっくりまりさがはるかの大群に覆われてしまい、
それに押し潰されたゆっくりまりさは、物言わぬ葬式饅頭となって
しまった……合掌

※

四人が事務室に戻ると、そこにはたんこぶを付けて正座をしている九龍と、二人の女の子がガミガミと彼に説教をしていた

「全く、あれほどはるかに水をかけるなど忠告したのに、九龍君は何をやってるんですか？」

「そうだよ！ 九ちゃんのおかげリミっちなおやんがグロッキー何だよ！」

「わっ悪い、俺が悪かった！ でも俺はこれ以上説教を受けてる場合じゃないんだ……」

「説教って……アンタまさか逃げるつもりなの？」

「とんでもない、今日は全員で作曲家の挨拶の日だろ？ だから……もう後少しで時間……何だけど」

「時間？」

九龍の言葉に、誠や慶次朗は時計を見る

時計の針はまもなく午後の12時になろうとしている

「……あっ！ 確か作曲家の挨拶の予定時間は12時までだから……」

「やべえ！ 急ぐぞ、多分作曲家の家で雪歩達が待ってるに違いねえ！」

「ひゃうー！ 急がないと！」

「とにかく、皆急ぐぞ！」

事務所にいたプロデューサー全員は急いで階段を駆け降り、作曲家の家まで走って行った

※

一同は、豪華な屋敷の前にいた

「かぁーでっけえ、これがあのBRONTの自宅か……」

「うんうん、何だかわくわくして来たよあたし!」

「わくわくしてきたのは分かったが、ところで君は誰?」

「あたしは、燐、義道燐。燐って呼んでね♪」

慶次郎の質問に、燐と名乗った少女は後ろに腕を組んで、笑顔を見せながら会釈した

「義道? 君ってもしかして、京輔の」

「妹だよ。正真正銘血の繋がってるね。そして、今あたしの隣にいるのが、あたしの担当アイドルの秋月律子ちゃん」

燐の言葉に、一同は律子と呼ばれたおさげの女の子を見た。ともよは相変わらず涼しげな顔で燐を見る

「えっ? 君、プロデューサーじゃなくて……アイドルだったのか?」

「失礼ですね、私はこう見えてれっきとしたアイドル候補の一人なんです!」

「……私はこういうタイプは苦手だ」

一同は律子を見た後、このまま待つのもあれだからと、壁の横に付

いているインターホンを鳴らした

（あゝ誰だ？ みゝに何か用？）

「僕らは、今日あなたの家に来る予約をした、765プロの者です。」

（765……あなるほど、今みゝの家にさプロデューサーがまだ来ないって心配してる子がいたから、もしかしてあんたらかい？）

「そうです！ 僕らです、だから――」

（わかったよ、とにかく入りな。話しはそこからだ）

「ありがとうございます！」

代表として喋った誠はお辞儀をすると、一同は中に入り、玄関に向かった……

「神崎！ どこ行ってたんだよ！」

率先してまず顔を出したのは真だった

誠は真に向き直り、事情を話して彼女を納得させた

「ゆ……結城君！ 伊織ちゃんから話を聞きました！ 大丈夫ですか！」

「私は大丈夫だ、ただ……あの二人が」

真の次に顔を出した雪歩は、結城の指の先を見ると、その先にいる慶次郎の各肩に一人ずつ、人を抱えていた

右に真夜、左に利美を……

「ともよ！ アンタ一体どこで油を売ってたのよ！」

雪歩の次に現れたのは、右手にウサギのぬいぐるみを持ったデコを全快にした少女だった……

デコが全快の彼女、佩音ともよの担当アイドルである水瀬伊織は、ともよに近づいてそう言った

「……ごめん、九龍が……はるかに水をかけた」

「そうなの、でも、この水瀬伊織を待たせるなんて、アンター——」

「バーカ、バーカ、ゲラゲラゲラ」

伊織が話しを最後まで喋る前に、ゆっくりは伊織に対して笑いながらそう喋った

「なっ何よ！ ただの饅頭のクセに、アタシに盾突く気？ キー、許さないんだから！」

「ゆゆっ！ 何をする、私の神聖な体に触れて良いのは、ともよただひとりりりりりりりりりり！」

伊織は、ゆっくりを掴み上げ、もの凄い勢いでぶんぶん振り回した

「……伊織、行くよ」

「何よ！この饅頭！ デカイくせにアタシに盾突くなんて！ ちよつともよ！ 待ちなさいよ」

「ゆゆっ！ 伊織のせいでもよ見えなくなった！」

「何よ！アタシのせいだって言いたいの」

伊織とゆっくり以外の一同はいがみ合っている二人を持ち上げて、喧嘩させながら強制的に移動させた……

「君達がみくに新曲を頼んだプロデューサー達？」

「はい、私達が……貴方に曲を依頼したプロデューサー一同で、その曲を歌うのが、彼女達です」

結城は、後ろにいるアイドル候補生達を見ながらそう言ったが、今、タバコを吸っているこの作曲家、

「BRONT」はアイドル達を睨んだ

「へえ、この子達がみくの作った曲を歌うんだ……」

「ですから、曲の提供を——」

「はあ？……お前、何勝手に話しを進めちゃってるワケ？」

B R O N Tは、タバコを灰皿に強くこすりつけて火を消し、今度はこちらを睨んできた

「お前、ハイスラでボコるよ？それに、みーは実力の無い奴に提供はしないから」

「実力があるって証明するためには？」

結城はB R O N Tに近づくと、彼女は一枚のC Dを机に置いて

「この一枚で、次のアイドルオーディションに全員合格して、ただし全員同時にかつリアルタイムで、それが出来たらみーのC Dの作曲とジュースを奢ってあげる」

そう言ったのだ

「無茶だ！ たった一枚でリアルタイムかつオーディション合格だなんて！」

「出来るよ？ あんたらの脳ミソが加速すればだけどね。ちなみにそのC D焼き増し出来ないようにしてるから、んじゃあ頑張ってぬ！」

彼女の言葉に、一同は呆然と立ち尽くし、一枚のC D

「C o l o r f u l D a y s」を見つめていた……

※

「一枚の曲で、全員がオーディションに合格ですか？」

「そうなんだよ……一体どういう意味なのか、さっぱり分からないんだ」

「それって、要するに『有望なアイドルだけに作曲を任せる』って事ですよね？それじゃあ……」

「選ばれるのはこの中の一人ってワケか」

慶次郎は千早にそう言った

「何言ってるのよ！有望なアイドルって言ったら、この水瀬伊織ちゃんに決まってるじゃない！だからこのCDは、私が使——」

「うっうー！伊織ちゃんずるいですー私だって有望なアイドル候補生の一人だから、私が使うんです！」

「ずるい！亜美達だってその曲歌って見たい！」

伊織の言葉を火種に、何やら一枚のCDを巡って喧嘩が始まっている

「あらあら、賑やかで楽しそうですね」

「あずささん……あれを楽しそうって言うんですかね？」

あずさの言葉に真夜は静かにツツコミをいれ、喧嘩に介入するどころか、その様子を傍観していた

ギャーギャー騒ぎは収まる事を知らず、さらに

「こら、アンタ達、喧嘩してる場合じゃないでしょ！」
律子が止めに入り

「そうですよ！　とにかく喧嘩しないで皆で考え……あわわわわあ！」
春香も彼女達の説得を試みたが、ドジな性格が仇となり、そのまま巻き込まれる形で火種の中に入ってしまった

「まったく……こんな大事な時に」
千早は呆れながら、慶次郎の肩にいるちひゃーの頭を撫でる

「……」
慶次郎はアロマを吹かすと、パイプを持ち替え……二回鳴らしたその瞬間、一同は一斉に慶次郎を向き、喧嘩をしているアイドル達は喧嘩をやめた

「まったく、喧嘩なんてしてる場合か？」
慶次郎は真剣な表情で、一同を見ながら、ジュースを飲んだ

「確かにそうだけど……でもこの一枚しかないんだよ？」
燐の言葉に慶次郎は腕を組み、うーんと悩みはじめた

「なあ、その一枚でみんな踊れないかな？」
結城は自分にある一つの疑問をみんなに話した

「一枚で、みんな踊るなあ？」
「そうだ。全員がリアルタイムかつ合格をする、だがCDはこれ一枚だけ……となると、私はこの策しか考えられない、大型ユニットを組んで……一時的に一組として参加する。もちろん、オーディションで勝つ為にはかなりのチームワークが必要となる。あの人は多分、そんなクイズを出したんだろ……」
結城は拳を手の平にぶつけて、一同に言った
すると、隣から拍手が聞こえたので、結城達は後ろを振り返る。そ

の先にはBRONTが歩きながら拍手をしていて、彼女は一同の中に割り込んだ……

「はっはっはっは、正解だ。そう、一枚で合格するって事は、全員が一組となつて、そのチームワークっぷりを見せなきゃなんない……要するにだ、みくはお前らがプロデューサーとしての器に相応しいか。オーディションなんて嘘をついてこの問題を出したのさ」

「うっ嘘だあ？」

「そうだよつつうか、本気でユニット組んで出ると思ってたの、その君」

BRONTは誠を笑いながら見て、そう言った

「オーディションは、最大で三人までなんだよ？」

「そ……そうだったんだ……」

誠はその場にへたり込み、安堵の息をついた

「ま……実は再来週に、お前らにちょうどいいオーディションがあるんだけどね」

BRONTは、テーブルに一枚の紙切れをたたき付けると、一同を見て9枚のCDと、コーラを出した

「まっ初めての正解者だ、お前らにプレゼントしてあげる、けどその前に曲にあった人物を探さないとネ」

彼女は今度は千早達の方を見てウイंकをした

「探すってどうやって？」

「心理テストよ。さあさあ皆こっちに来てちょんだい！」

九龍の質問に彼女は軽く答え、アイドル達を自分の部屋に誘導していった……

※

「しかし……新人オーディション募集とは……」

真夜はオーディションについて書かれている紙を手にとると、懐から手帳とペンを取り出し、サラサラと書きはじめた

「何を書いているんですか？」

誠は真夜にそう聞くと、真夜は手帳を誠に見せる。そして、その内容を見て誠ははあ〜と納得の表情を見せた

その手帳には、今後の活動や休み、そしてあらゆる予定が書かれており、真夜は手帳を返してもらうと、にこりと誠に微笑んだ

「にしても、あのBRONTさんがあんな人だったなんて、知らなかったぜ」

「うむ、言葉は荒っぽいが、意外にいい人見たいだ……あれなら、私も信頼できる」

慶次郎と結城は、そんなことを呟きながら、互いに笑い合う

その時であった、結城がふと隣を見ると結城の隣で堂々とコーラを飲んでいる銀髪の青年がいた……

その光景に、一同は全員その青年に視線を送る

「……はあ、あんたらだろ？765プロのメンバーってのは？」

視線を感じた青年はそう口にする、立ち上がってこちらを向いた

その青年はジャンパーを着用し、膝の部分に穴が空いているGパンを穿いて、顔立ちは凛々しく、見るものを魅了してしまいそうな美

しい顔だった

「初めまして、俺の名前はソワレ・アルディバート。ここに居候させて貰ってる、しがないプロデューサーさ……」

銀髪の青年、ソワレは初対面とは思えない態度で神崎達を見て、そう挨拶をした

「ソワレと言ったな、アンタもプロデューサーの一人なのかい？」

真夜の発言に、ソワレは真夜を振り向き、そうだと首を縦に振った

「だが、俺はアンタらとは違うプロダクションでね……言うなれば俺はアンタ達のライバル的存在さ」「ライバルか……そいつは光栄だな、ソワレと言ったな、私は桂木結城。以後お見知り起きを」

「結城だな……そこの嬢ちゃん……っ！」

ソワレは、ともよを見て驚愕した

ともよは、不思議な物を見るような顔で首を傾げ、ソワレに近付いた

「……アンタ、名前は？」

「……佩音……ともよ、ところで……私の顔に何か？」

ともよは、ソワレに自己紹介をすると、彼に質問をした

「いやな……アンタが、昔いた俺の妹にそっくりでな……すまないな……あはっアハハハハ」

彼はそう言くと、照れ臭そうに頭をかきながら席を立ち、じゃあなっと手を振りながら自分の部屋に戻って行った

「……変なヤツ」

慶次朗は、テーブルに置いてある「ザ・デビュー」と書かれたオーディションのチラシを見ながら、そう言った

※

しばらくして、心理テストを受けていた担当アイドル達が、各人一枚のCDを手にして戻ってきた

最後にBRONTがCDを14枚入った箱を置くと、彼女は本当に皆に缶ジュースを渡しながら

「この14枚は餞別だ、あんたら見たいなアイドルプロデューサーは稀によくある事だから。みーのプレゼントだよ！」

と、さっきまでの厳しい表情から、優しい顔に切り替えて皆にそう言った

「ありがとうございます」

一同は、彼女にお辞儀をすると、彼女は笑いながら

「べっ……べっに、嬉しくも無いんだからね！」

っと、珍しく普通に話した

それを見て皆は笑い、一枚のチラシを見て、明日のオーディションに参加すると一斉に決意表明をしたのであった……

※

その頃、自分の部屋に戻ったソワレは、風呂の湯に浸かりながら

「佩音ともよ……か……アイツ、本当にフェルトにそっくりだったな……まさか……な」

そう自分に言い聞かせながら、彼は白い天井を眺めた

「そうだよ……フェルトは死んだんだ、クソオヤジの計らいでな……」

彼は窓に移る綺麗な景色に目を通しながら、そんな独り言を呟いたのであった

共通視点 初日 謎掛ける作曲家（後書き）

皆さん、お待たせしました、ゴクトです

四ヶ月の月日をかけて、やっと8話目が投稿出来ました

前回、私は1000アクセスを越えたら本気出すなんて言いました
が……今日、アクセス数を見てみたら何と10倍の11290でした

何だか絶対終わらせないといけない気がしてならないです！

わたくしめ、まだまだ未熟な所がありますが、完結目指して頑張りたいと思います

さて、今回の話は、作曲家挨拶を元にしたシナリオで、今回出たB
RONTという作曲家も、この物語の重要な鍵となります
ちなみに、名前が名前だけに、にわかなブロンティストの人という
設定が着いた可哀相な人でもあります（笑）

さて、次回はいよいよ彼等の初陣となります。

果たしてアイドルとしてデビューなるのだろうか？

それともこのままバットな結果で終わるのか？

それでは皆さん、次回の後書きでまた合いましょう！

それでは、アスタ・ラ・ビスタ（ハハ）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140h/>

三人の道 ～三人のプロデューサーとそのアイドル達の物語～

2010年11月15日09時59分発行